
すれ違いゆく世界

岸川 滢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すれ違いゆく世界

【Nコード】

N0981W

【作者名】

岸川 滯

【あらすじ】

組織を潰して一年・・・

薬のデータはすでに消えていた・・・

泣いて謝った哀・・・

コナンは許した・・・

コ哀です

1話

一年前に組織を潰し・・・アポトキシンのデータはもうすでに消滅している事が発覚・・・

灰原は泣いて謝っていたが、俺は諦める事にした

今は小学3年生・・・

俺は毛利探偵事務所を出て博士の家に住む事になった・・・

～学校～

「あーいちゃん！」

「吉田さん・・・」

「なーによんでんの？」

「医学書」

「うっわー

漢字ばかり

目いたくなっちゃうよ

よく読めるね」

「ありがとう

で、どうしたの？」

「いっしょに遊ぼう？」

「ええ・・・いいわよ」

そのとき哀ちゃんはしおりを挟もうとした

「ん？

みーせて

写真だ・・・

左側に移っているのが哀ちゃんだね？

隣は・・・友達かな？」

そのときコナン君が寄ってきた

「ん？」

へーえ

灰原も笑うことあんなのか・・・」

「何よ・・・

吉田さんごめん。

これ大事な写真だから・・・」

哀ちゃんはそのうって急いで写真を本に挟めた

哀ちゃんとその後いっしょに遊びに行った・・・

桜

私は家に帰った・・

どうせ工藤君は図書館に行ってから帰ってくる

博士は半年前にアメリカに行ってしまった・・

私は本に挟めた写真を取り出した・・

今の私と全く変わらず笑う10年前の私・・

これは、アメリカから一週間だけ日本に帰らせてくれたときお姉ちゃんと写ったもの・・

私は素直に笑えた

隣にいるお姉ちゃんはまだ幼いけれど、あのお姉ちゃんだった・・

その日のうちに近くにあったスーパーに二枚現像しに行って・・私はそれを綺麗に袋に包んでアメリカに持っていったんだっけ・・

「ただいま」

「お帰り」

私は隠しそびれた写真を落としてしまった
拾ってくれたのは工藤君だった

「なあ・・・これ、10年前の写真だろ？」

「え・・・？」

「ここに写っているお前は10年前の姿

そして隣に移っている黒髪の女の子は恐らく姉さん」

「なわけ・・・ないじゃない」

「このバックに写っている建物・・・

とても有名な桜公園・・・

後ろに名前も書いてある

だから桜も写っている・・・

でもな、この公園、3年前名前が変わって、桜通公園に変わったんだよ・・・」

「嘘・」

10年前の記憶

「あってんだろ？」

「ええ

あってるわ・・・

この写真は、私が日本に戻ってきた時・・・姉がとったものよ
でも、どうしてわかったのかしら？
たった人目見ただけで」

「お前がそんなに大事にする写真、お前ならもう一枚持ってると思
ってよ・・・

それにそのお前だと思われる人物、やっぱりどこか子供っぽかった
からな・・・」

「あら、そう」

「なあ・・・俺さ・・・」

「なに？」

「いや・・・なんでもない・・・」

「そう・・・」

（やっぱ・・・まだいえねえな・・・）

公園

写真の件から、2週間後

俺が図書館から帰るとき・・・公園でアイツを見かけた・・・

「灰原・・・」

俺はなぜか中に入っていた・・・

「灰原！」

灰原は誰もいない公園の真ん中でブランコに乗っていた

「あら、江戸川君・・・」

「何してんだ？」

こんな場所で」

「見てわからないのかしら

遊んでるの」

「オメエにこんな趣味あったのか」

「まあね・・・

たまに無性にやりたくなって・・・

もう十数年はやってなかったもの・・・」

「帰ろうぜ」

「はいはい」

灰原はそういつて飛び降りた

「行くんでしょう？」

「ああ・・・」

「あなた、図書館にいたんでしょ？」

「なんで・・・」

「あなたが入っていくの見たもの」

「ふーん

オメエさ、いつブランコなんてやったんだ？」

「4歳の時

姉に連れられて公園に行ったとき」

「んで？」

「初めてで・・・お昼から真っ暗になるまでずっとやってたわよ・・・

結局姉に無理やり連れて帰らされたけれどね」

「オメエさ、昔話になるといつも姉さんが出てくるよな」

「・・・ない・・・当たり前じゃない

楽しかった事なんて、すべて姉がいたときぐらいなもの・・・」

「だ・・・だよな・・・」

(怒らせちゃまったかな・・)

永遠

私は公園から帰り夕食をすぐに済ませてシャワーを浴び終えて今は自分の部屋にいる

そのとき自分の携帯が震えた

「黒羽君」

私はベッドにある携帯をとってベッドに倒れこみながら出た

「はい」

「俺、快斗」

「知ってるわよ」

表示に出てたから」

「っもお・・・」

ホント、どうして哀ちゃんはそうかな・・・」

「どうしたの？」

わざわざ電話してくるなんて、珍しいじゃない」

「べっつに・・・」

哀ちゃんどうしてるかなあって思って」

「どうしてるも何も、部屋で涼んでただけよ」

「あ、そう」

「で、どうしたの？」

「この前さ、永遠の美貌を手に入れるって内容のドラマあったんだよね」

「へえ・・・」

「でさ、哀ちゃんはどう思う？」

「別に

くだらないと思うわよ

人間っていうのは・・・期限、限りがあるからその分ががんばろうとするんであって、無限なら・・・みんなすべてを後回しにする・・・

バカみたいな話だと思うわ」

「やっぱり哀ちゃんはそう思うか・・・

ありがとう

じゃあね」

「なによ・・・」

永遠の美貌・・・か・・・

永遠がないから・・・そろそろ、この思いも片付けないとね・・・

永遠（後書き）

とても地味です

劇

寒い

はつきりいって寒い

当たり前だ

もう11月なのだから

ついこの前まで公園で遊べるくらいだったのに

私はそんな事を考えながら先生の話聞いていた

「で、この劇でいいでしょうか？」

今は学習発表会の劇を決めている

「では、多数決で決めましょう」

多数決ねえ・・

私は何をやりたいわけでもなかった

意見は二つ

江戸川君が提案した探偵ミステリー

それと恋愛物語

二番目の恋愛物語は先生が考えた話なんだとか

結局クラス30人中ミステリーは江戸川君を含め1人

後の29人は恋愛物語だった

私はミステリーだけは嫌で恋愛物語の方に手を挙げた

ミステリーって・・・江戸川君の好きなギリシャ語通訳の話でしょ？

というかそうだった・・・

絶対嫌ね

隣の江戸川君は頭をかきむしり残念そうに右頬を机につけている

「んもゝ

んでだよ・・・」

「小学二年生の子にシャーロックホームズの事件の劇をやるうなんていうほうが間違っているのよ」

「んのだよ・・・」

次に役決めになった

この学校はクラスごとに劇をやるため、クラス内で決められた

「では、王子役は誰にしましょう

推薦でも立候補でもいいです」

そのとき一人の女の子が手を挙げた

あの子は・・・東夢見だったかしら・・・

「はい、東さん」

「推薦なんです、王子役はコナン君がいいと思います」

「へ？
俺？」

そういい終えて東さんが座ると、たくさんの人が手を挙げた

「・・・あ・・・岡野さん」

おかのみく
岡野美久さん

「私も同感で、王子様役はコナン君がいいと思います」

そのときいっせいに「同じです」「僕も!」という声が振ってきた

「では、王子役はコナン君でいいですか？」

「「いいです!」」

「いいです・・・」

江戸川君も諦めたらしい

まあ、江戸川君はクラス一の人気者だから、当たり前といえは当たり前だね

「では、姫役は誰にしましょう？」

王子役と同じく、推薦も立候補もあります」

「はい！」

円谷君が手を挙げた

「はい」

「僕は、姫役は・・・は・・・は・・・灰原さんがいいと思います！」

「はあ？」

結局こっちも本人のことを置いて決められてしまった。

「はあ・・
やりたくないわ・・」

「それはこっちのせりふだ」

「何よ」

（まったく・・・こんな人と恋愛する劇なんてやれるもんですか・・・）

練習

劇の練習中

はつきりいって嫌ね

この劇は去年と違って、ひとつの役に一人しかつかないものらしいから、最初から最後までこの人といっしょにやらなきゃいけないじゃない

ちなみに自分の役の名前は後で決め、私はなぜかハート姫、江戸川君はスピード王子という名前だった

「ハート姫！」

「スピード王子・・・」

「心配しましたよ」

「ごめんなさい」

「ちょーつとまった！」

哀ちゃん、感情がこもってないよ

罪悪感を感じているようにいわないと！」

「そんなこと言われても・・・」

ほら、こうなる

たいした役じゃなければ人にも気付かれにくい

特に一回しかせりふのない役とか

でも一番せりふの多い役だから台本を覚え、しっかりしゃべれているかを見られる

こんな役、吉田さんにピッタリなのに

「ねえ吉田さん？

もう少し控えめなドレスないわけ？」

「ないよお・・

その水色で胸元にリボンがあってフリルがあるのが一番控えめなんだから」

このドレスは吉田さんに借りている

吉田さんのドレスはすべて派手だ

ひとつはピンクのドレスに針金が入っていてふわっとしていて、胸元にはペンダント、首元にはレース、まるで童話のお姫様の服をそ

のままもって来たようなものばかり

もうひとつはとても綺麗な黄色で、胸と腹の境目の近くにフリルが着いていて、下半身の辺りがより薄くなっていて、それが何重にもなり、おまけに背中編み上げになっている

そして吉田さんの自慢が、オレンジ色で、下半身の辺りはカーテンのように少したれ、また上につられて少したれたような感じになっている、胸元に派手なバラがついている

結局一番地味だといってくれた

でもその代わり、薄水色の手袋をはめる事になり、靴も水色のヒール

足は素足だった

何でもこれはシンデレラをモチーフに作られたんだとか

しかも本番の日はメイクをするということになっている

内側がふわふわしていて暖かいから、寒い事はないけれど、この格好は辛い

でもどうせ博士に頼んでも同じようなものを選びそうだし、きっと江戸川君は有希子さんに連絡して何かもっとすごいものを持つてくるに違いない

この手段が一番だった

にしても素直で体が弱くあまり人と関係を持っていなく、仲のいい王子と恋に落ちる話なんて、私がやるものじゃないわよ

そう、蘭さんとか・・

私は強気で悪の世界の王子の娘とか・・

そして真っ黒なドレスを着て真っ黒な手袋はめて、真っ黒な靴を履いて・・

そのほうが似合ってるわよ

そう考えながら練習を続けていた

本番（前書き）

ちよつと・・あれかもしれません

苦手な人はやめるのを勧めます

（あれじゃわかんねえんだよ）

本番

今日は学習発表会の本番

行きたくない・・・

やりたくないから今日は家にしよう・・・

博士は出張でそこから直行で学校に来るから・・・

工藤君には熱があるとか嘘ついて・・・

きつと私と練習してくれた吉田さんが代役やるでしょ・・・

私はそう考えながら吉田さんとおそろいで買ったアザラシのぬいぐるみを抱き枕にして抱きながら布団に顔をうずめた

こんこん

ほらきた

きつと工藤君

「おーいねてんのか？」

「私、ちょっと・・・」

「『熱がある』だろ？」

「え・・・？」

「入るぜ」

見抜かれ、中に入られた

「ちょ・・・」

工藤君はベッドから私を起き上がらせた

「顔は赤くねえし手も冷たい

熱は・・・」

工藤君は私の額に自分の額をひつつけた

「なし！

健康！」

「ちょっと・・・」

「熱があるっていつて休むつもりだったんだろ？」

残念だけどいっしょに演技してもらおうぜ」

「・・・」

バカ・・・

着替えるから出て」

「お、おう」

工藤君はそういつて出た

衣装はあっちにある

ただ着替えやすい服を着るだけ

着替えてリビングに出ると工藤君が朝食を用意して待っていた

「あら、珍しいわね

あなたが朝食を作るなんて」

「オメエがおきねえで腹減ったから先作った
これオメエの」

「ありがとう」

彼が作ったのはトーストに玉子焼きだった

「いただきます」

玉子焼きを食べてみた・・

「はあ？」

「ん？」

「あなた、玉子焼きに何をいれた？」

「えっと・・・塩」

「どこにあった？」

「台所の下の調味料棚の真ん中のやつ」

「バカね、あなた味見しないの?!」

「しないけど・・・」

「あなた入れたの、砂糖」

「嘘」

「ホント

調味料棚の真ん中は砂糖よ

上が塩、真ん中が砂糖、下が空きだから」

「書いとけよ」

「私しか使わないのに書かないわよ」

「くっそお・・・」

「あなたよくそれで自炊したわね」

「蘭にやつてもらってたから・・・」

「あなた、それじゃあ元に戻ってもずっと蘭さんに頼るつもりだったわけ？」

「蘭さんにあきれられるわよ」

「しかたねえだろ」

「はあ・・

いま塩とつてくるから」

結局何とか朝食を終わらせて家を出た

これから・・劇が始まる

劇 1

私が学校に行くと、すぐに衣装を持ち、女子更衣室に向かった

私はよく着方がわからないので、吉田さんに手伝ってもらうけど、多分彼女は先にいっただろう

私が入ると、中にいたのは吉田さんだけだった

「あ、哀ちゃん

着替えるよ」

「ええ・・・」

私はあの水色のドレスに水色の手袋、水色のヒールをはいた

「じゃあ、次はメイクだよ？」

「メイク・・・ねえ・・・」

「歩美がやってあげる！」

「あなた、あの後上達したの？」

「もちろん！」

このドレスと哀ちゃんにあうメイクがどんなのか、お母さんにばかり教えてもらったから！」

私はそれを聞き、黙って鏡の前に座った

吉田さんのメイクは前回よりもずっと上手で、メイクアーティストのようだった

「うん、ばっちり！」

そのメイクは・・・

私がかつてsherryだった頃していた「暗くてださい」メイク

ではなくて、まるで絵本のお姫様のメイクをそのままつけたような綺麗なメイクだった

確かにそれは私にもドレスにもあうものだった

「吉田さんは？」

「このオレンジのドレスに、メイクだよ？」

「髪型は？」

「うーん・・・」

やっぱり短いからアレンジできないんだよねえ・・・

一応昔使ってたヘアゴムは持ってきたんだけど・・・

いろいろ可愛いお気に入りのカチューシャも持ってきたけど・・・

何かいつもと変わらなくてさ・・・」

「じゃあ、メイクが終わったら結んであげるわ」

「うっわあ

哀ちゃんじょうず」

「はい、オッケーよ」

「すごいよ！

こんな編みこみはじめて」

私は左右に編みこみをした

ひとつずつではなくて、細いのをたくさん

・ お姉ちゃんが小さい時やってくれたのを熱心に見て覚えたんだっけ・

でもすぐに髪を切っちゃって・・・自分の髪じゃウェーブがあって出来なくて・・・

小さい時は美容師さんになりたかったんだっけ・・・

でも私の将来はもう決まっていて・・・

お姉ちゃんは夢は自由だからきっと志保ならなれるよっていったけれど・・・

小学生になって私に夢を選ぶ自由なんてない事を学んで・・・

それからはそんな事忘れてた・・

「哀ちゃん、リハーサル

そろそろだよ？」

「あ、そうね

いくわ」

舞台に行くと、幕は閉じていてお客は見えないものの、とても騒がしい

舞台の上には工藤君がいた

工藤君の衣装は騎士をイメージしたものを小林先生が作って・・

この話自体、あのシャッフルロマンスのアレンジみたいなもので・・・衣装はあの騎士の衣装とほぼ同じで・・・かぶともある

「じゃあ、行くぜ」

「ええ」

「ではこれから、2年B組の、『シャッフル・リング』をはじめます」

この題名はいったい何を意味したいのか分からないけれど小林先生が決めたものらしい

この学校ではクラスごとにどんな劇をするのか、どの人がどの名前なのかなど、ちゃんと看板を作られている

それは6年生が代表委員でつくったものだ

メイクされた私の顔とクールな工藤君のかおが写っている

幕が開く・・・

そこにいるのは私だった

「(ナレーション) ここにいるのがハート姫です

ハート姫は幼い頃から病弱で、学校などにもあまり行けず、友達が少ないです

でも本当は、素直で優しい女の子でした

ハート姫のお父さんはこの国を仕切る国王であり、王子でした

でも、そのお父さんは何者かに殺されてしまいました

ハート姫はとてもショックを受けましたが、国王になり、国の姫になりました

そのハート姫には、好きな人がいました

それは、隣の国の国王の息子、スペード王子です

スペード王子は、その国の国王である王子の父親が、ハート姫のお父さんととても仲がよく、

昔から友達でした

そしてそのスペード王子も、同じくハート姫が好きです・・

今回はそのお話・・」

「ハート姫」

「あ・・ダイヤ女王・・」

「女王なんて、堅苦しく言わないで

友達でしょう？

我が国の国王さん」

「でも・・」

「それに、友達でもあって、私のお父様のお兄様の娘さんでしょう？

一応、親戚だし」

ダイヤ女王役は吉田さん

とても似合っている

「（観客）あの二人、美少女ね」

「（観客）きっとメイクを落としても綺麗だわ」

私が観客席を見ると、博士は微笑み、工藤夫妻はビデオカメラを二人とも持ち、有希子さんなんてわが娘の劇を見るような顔をしている

「（ナレーション）ハート姫には、ハート姫のお父さんの弟さんの娘さんがいました

その娘さんの名前は、ダイヤ女王

親戚ですが、明るいダイヤ女王は友達として接してくれます」

「ハート姫、もっと笑ってよ」

「え・・・」

「もしかして、恋のお悩み？」

国王さんも恋するんだねえ・・・」

「あ・・・いや・・・」

「スピード王子だね？」

「ダイヤ女王・・・」

「あの王子様、カッコいいもんね」

「やめてよ」

それより、今日は舞踏会でしょう？」

「大丈夫

ドレスはちゃんとあるよ」

「そういうことじゃなくて、女王もいろいろあるじゃない」

「今日は何もないもの

じゃあ、後で」

「ええ」

「（ナレーション）今日は舞踏会の日

舞踏会には王子も出席します

ハート姫はそれが楽しみで舞踏会に出席します」

「では、いってきます」

「お気をつけください」

「はい・・・」

「（ナレーション） 舞踏会の会場までは、歩いていきます

姫が希望しました

そのとき・・・」

「きゃあ！」

「フッフッフ

ハート姫だな？

悪いがついてきてもらう！」

「やめてえ！」

「お前をさらい、お前の身代金をたっぷりもらうんだ！

アーツハツハツハ」

「きゃあゝ

誰か助けてえ！」

「やめろ！」

そのとき工藤君が舞台上から降りてくる

下にはマットがあり、怪我がしないようになっている

「ハート姫をかえすのだ！」

「お前は・・・スペード！」

「（ナレーション）そこに現れたのはスペード王子

王子は剣を取り出しました」

「はぁ・・・」

「（ナレーション）王子はすぐにやっつけました」

「大丈夫ですか？」

ハート姫」

「ありがとうございます・・・」

ねえ・・・どうして？

どうしてあなたはいつも私を助けてくれるの？

ねえ・・・

あなたは・・・どうして・・・」

「それは・また今度」

劇1（後書き）

シャッフルロマンスと似ていないかもしれない・・

ちよつともらっただけになったかも・・

お許しを

もしよければ感想ください

もらえず寂しいですW W

2

「（観客）あの子達すごく演技がうまいわねえ・・・」

「（同じ）本当」

「（ナレーション）会場に着くと、二人は踊り始めました」

「いつでも素敵な舞踏会ね」

「ですね」

「（ナレーション）そのとき、怒りの声が響きました」

「なぜよ！」

「だから・・・」

「王子はあたくしのものですわ」

あなたのような汚らわしい女のものではありませんわ!」

「なんですって?」

クロウ王子は私と踊りたいと申してきましてよ?

王子が踊りたいんですわ

いいじゃありませんか!」

「なんですって?」

たとえば誘われても人の王子であれば、手を引くのが常識ですわ!

どうして断らなかったんですの?

私の王子ですのに

王子も王子ですわ!

どうしてこんなどこの馬の骨かもわからない娘に手を出して

あたくしがいるというのに！

いったいどうしてですか？」

「やめなさいあなたたち

ここは講義する場ではありませんわ！

けんかをしたいのであれば、別の場所へ行きなさい！

皆さんもお気を悪くしますわ！」

「なんですか？

あなたは今回の件の部外者ではありませんか！

この会の責任者だからって偉そうに！

あなたの家族もまとめて訴えてもいいんですわよ？

今回の部外者の人間は口出しをするんじゃないかもしれませんわ！」

「やめましょう

皆さんお気を悪くしますわ

この方のおとおり

私は何度でも謝罪いたします

ですから・・・」

「なんですの？

突然自分の条件が悪くなったとたんに！

謝罪すれば済むとおもって？

それで済めば警察など要らないんですわ！

裁判も必要ないんですわ！」

「それとこれは別ですわ！」

「何ですって？」

「やめてえ！」

「こ・・・国王・・・」

「（ナレーション）そう、ハート姫は言い争い・・・争いが大嫌いでした」

昔戦争で母親が被害にあい死に、それ以来争いが嫌いでした」

「皆さんやめなさい！」

争いは！」

「なんですの国王！」

「やめなさい！」

うっ・・・」

「姫！」

「ゴホ・・・ゲホ・・・ゴホゴホ・・・」

「（ナレーション）姫は大声を出すと、突然咳をしてしまいます」

「姫・・・」

「ううつ・・・」

「（ナレーション）姫はそのまま気絶しました」

姫はそのまま王子に抱きかかえられ王宮に戻りました」

「姫・・・」

だいじょうぶですか？」

「ええ・・・」

バカですわね・・・

大声を出せば、突然咳が止まらなくなってしまうことぐらい知っていたのに・・・

お姉さまみたいに・・・体が強くなって、自由じゃないのに・・・」

「姫・・・」

「(ナレーション) そのとき・・・」

「姫・・・好きです・・・」

「口付けた・・・」

え・・・

フリじゃないの？

今確かに・・・

キスされた・・・

「ちょっと・・・」

小声で話しかけてみた

応答がない・・・

このままじゃ・・・

「私です・・・

スピード王子・・・」

2 (後書き)

せりふが多い・・

これ覚えられる小学二年生すごいな・・

告白

「お父様」

「どうした
スピード」

「お父様に大事な話があります」

「なんだ」

「隣国のハート姫と結婚します」

「・・・そうか」

いいだろう

式はこっちで挙げなさい」

「はい」

「（ナレーション）それから・・・一ヵ月後でした

二人が

永遠の愛を誓ったのは・・・」

これで劇は終わった

残る問題は・・・

キス

だった

私が更衣室に行くとそこには吉田さんが待っていた

「ねえねえ哀ちゃん

ほんとにキスしちゃったんだ」

「ば・・バカね

そう見せただけで、本当にはしてないわよっ」

「どうだか？

でもよかったじゃん

コナン君とラブシーンが出来て」

「やめてよ」

「はい、オッケー

メイクはこれで落としてきて

それを返すのは明日でいいから

もう解散だって」

「ええ」

私は顔を洗いに行き、そのついでに江戸川君を児童相談室によびだした

「ねえ工藤君」

「んだ？」

「あのキス、どういふつもり？」

「・・・」

「フリだけって話だったわよね？」

「ああ・・・」

「なのに・・・どうして・・・

その後の質問にも応答しなかった

どういうつもりなの?!

あなた・・・好きでもない人にキスして気持ち悪くないの?!

平気なの?!

ねえ・・・

なんとかいいなさいよ!」

静かで広い相談室には私の低い「宮野志保」の声が響いた

「・・・かったんだよ・・・

とめられなかったんだよ・

オメエが・好きだから・」

「え．．．．．？」

私は呼吸^{いき}をすることも忘れて目を見開いていた

証拠

「つちよ・・・っと・・・」

気付けば小さく・・・でもあたたかな工藤君に抱きしめられていた

「めて・・・やめて！」

私は体を左右に振った

工藤君は無表情で私から離れた

「やめて

冗談は

キスの次は抱きしめるのね・・・

あなた、熱でもあるんじゃない？」

「冗談じゃねえし熱もねえよ

もしそれでも疑うんなら証拠をやる」

「なによ」

工藤君は次に顔を近づけキスをしはじめた

「ん・ん・んーん・ん・ん」

工藤君は私の口に舌を突っ込んだ

離れようにも背中には腕がまわり、離れられない

たとえ子供の力でも今の私にかなうはずもない

工藤君が唇を離したときには私の息はひどく荒れていた

「殺す気・・・？」

「いや

証拠を突きつけたただだ

これでわかったろ？

俺はお前が好きなことを

真剣に考えてみてくれ」

「・・・・・・」

工藤君はニィツと笑って部屋を出て行った

私の息はまだ荒れていて、心の中はそれよりも荒れていた

蘭の今まで（前書き）

蘭ちゃんかわいそ・

蘭の今まで

私の心は荒れていて、まるで泥棒でも入ったようだった

もしもあの事が本当だったとしたら大問題になる

工藤君は解毒剤が作れないと知った時蘭さんに「もう帰れない」と電話したらしいけれど、今でも蘭さんは心に傷を負ったまま

それなのに私が工藤君と付き合っているはずもない

私が工藤君を好きなのは事実

でもそれだからといって愛し合っているというわけじゃない

でもあの人が・・・工藤君が好きでもない人間にキスをしたり抱きしめたりするはずもない

私はそんな事を考えたまま家にいた

家には置手紙があり、内容は「今日は蘭のところに行く」と書かれていた

一応江戸川コナンは迷惑をかけられないため親戚の博士の家に預けられる事になったという事になっているため、いつでも遊びに行こうと思えば行ける

それを出来るとわかっていながらしなかった理由はひとつだけ

工藤君がきつと顔をあわせたくなかったから

自分のせいで傷つけてしまったとまだ罪悪感を抱いているため

実際のところ傷つけているのは私なのにそのことについて攻めもしないのは私に憎しみを抱いていないから

私のことをここから追い出さないのは私に憎しみを抱いていないから

元はうろつかれてばれたら自分のこともばれるからそのために匿っておくという内容で匿ってくれた

でもそのために匿う必要などない

いっしょにいてばれたら関わっていた事で調べられ、実は毒殺したはずの工藤新一だとバレル可能性も高い

だったら殺せばよかった

私に「死ね」っていつてくれればよかった

そうしなかったのは行っていたほど私に憎しみを抱いていなかったため

私をいつも助けたのも同じ理由

バスジャックの時こげこげの焼死体になってしまえば動揺して逃げ遅れた子供とも取れる

いや、それ以外に小学一年生が死ぬ理由などない

まさか小学一年生の子供がこれだったら死ぬると思ってわざと残るとも考えにくい

いや、考える方がどうかしている

そう、ほっとけばただの子供としか見られず、厄介な匂いをばら撒くものも消えてしまうはずだった

そして結局蘭さんと顔をあわせるのが辛くて避け続けていた

でも今日は私と顔をあわせづらくてきつと蘭さんのところへ行っただろう

*

ピンポン

「誰だろ・・・」

お父さんは事件で明日までかえらないしお母さんは仕事で沖縄に行
ってるのに・・・」

開けると・・・

「蘭ねーちゃん」

「コナン君・・・？」

「遊びに来ちゃった」

ちよつと灰原の機嫌損ねちゃって

顔あわせづらいから、とめてくれない？」

「いいけど・・・」

「やった！」

コナン君はそう言ってぐちゃぐちゃに靴を脱ぎリビングへ入った

「何か飲む？」

「うん」

お茶ちょーだい」

「わかったよ」

コナン君は変わっていなかったけど、少したって背が伸びたコナン君は昔の新一に似ていた

「はい、お茶」

「ありがとう」

喜んでコナン君はお茶を飲みテレビを見て笑っている

この笑顔を見るとなぜかどんな時でも元気が出てすべて悲しい記憶を忘れさせてくれる

多分それはコナン君の笑った顔、声が新一に似ているからだと思う

今私は高校三年

そろそろ進学について考えなきゃいけない

園子は真さんについて行って外国に行くといっていた

お嬢様だから自由だもんね・・

和葉ちゃんと服部君はもうラブラブで仲良し

結局私だけだった

女一人のさびしいのは

私が落ち込んでお母さんとお父さんがよりを戻してお母さんが帰ってきてくれた

事務所は朝に行く事にして

やっぱりみんなの前では笑ってた

せっかく戻ってきてくれたのにドンよりだったら失礼だから

でも心は今も前も変わってなくて

今も新一を思い続けたまま・・

きつとまた帰ってきてくれると思って、「事件中で帰れない」とい

う内容の留守電を消さないでききつづける

夢には何度もあのシャッフルロマンスの夢が出てきてキスシーンで止まる

やっぱりもう女の子として恋をしてみたいと思う

初恋は片思いで消えてしまつて

お母さんには成人したらお見合いしてみたらとか・いろいろな言われたけど、何に手を付けることもなくて、結局私の中の時計は止ま
ったまま

「もう帰れない」の電話をもらったあの3秒から何も変わっちゃい
ない

結局あれだけががんばって都大会も優勝した空手も、退部した

今はただの女の子で、あれだけあった体力が全く落ちて他の女の子と同じになってしまった

これじゃ襲われても逃げる事すらできない

何かに打ち込めば忘れられると思って3年になる時いろいろな部活を考えてみたし、体験入部もしてみた

でも何をしてもうりたい気持ちにはなれず、今に至る

一時は園子やお父さんとお母さんに心配されるほどやせてしまった

結局病院に入院して点滴を受け続けた

やっと立ち直ってこれくらい

今日はコナン君が来てくれてよかった・・

そう考えながら食事していた

蘭の今まで（後書き）

長
す
ぎ
る

返し

蘭の家に行って次の日の晩

「た・・ただいま・・」

少年の声は大きな一軒家のリビングに響き渡った

「おかえり」

「え・・」

「ちょっと、目が覚めて夜中からおきてるの

早かったわね」

「あ、ああ・・」

「どうだった？」

「は？」

「蘭さん」

「あ、前よりは元気そうだったよ」

「そう・・・」

よかったわね」

「ちょ・・・」

「私、寝るわ」

「あ・・・」

そのまま部屋へ行ってしまった

くお昼く

「おはよう」

「はよ・・・」

「お昼ご飯、食べてないでしょ？」

冷蔵庫に残ってるもの、温めて

私いないから」

「灰・・・」

「話、あるの

食べる前に、いい？」

「ああ・・・」

「この前の、告白のこと

私、あなたのことそんな風に見てない」

「つまり・・・」

「世間一般、『ふられた』ってやつね」

「つか・・・

かっこわりー！！！！！！

めっちゃかっこわりいじゃねえか・・・」

「大丈夫

あなたならきつと、私よりいい恋人が見つかるわ

それに前話したわ・

あなたが17になったら、蘭さんに本当のことを話して・付き合えばいいじゃない

きつと蘭さん・怒りがあっても喜んでくれると思うわ

もう戻って来れないと思っていたあなたが戻るんだもの・

なんならすぐにでも私はかまわないけれどね・」

「デメエ・俺の気持ちを何だと思っていやがる！

俺はもう蘭の事を好きだと思っちゃいねえんだ

なのに戻っても・」

「あら、誰が恋人として戻るなんていったかしら？」

たとえばあなたたち二人の間にそんなものがなくても、元は幼なじみ
きつと蘭さん、幼なじみとしても悲しんでいる

あなた、頭がおかしくなったのかしら？」

「くっ・・・」

「あなたに選択肢は今のところ3つよ

ひとつ、10歳年下の人間に恋をして、工藤新一をすべて忘れる

ふたつ、今、または10年後、蘭さんに本当のことを話す

みつつ、今はそれを考えない

三つ目は後回しだから、いずれ考えなければいけないけれど」

「よつつ、お前と付き合う」

「誰もそんなこと言ってないわ」

「俺が考えた」

「知らないわ」

「あ、そう」

じゃあもう一度

好きだ・・・」

「うるさいわね・・・」

私はあなたのことが好きじゃないの」

「それはどうだか？」

「んぐ・・・」

またキスをされた

「よくわかったわ

あなたが私を隙だって言う馬鹿なことも

でも、私は好きじゃない

わかったわよね？」

「ああ・・・」

後悔

私は地下室に戻っても、工藤君にされたキスのぬくもりは残っていた

「はぁ・・・」

工藤君のことは好きだし、そのことも自分で認識している

キスされたときだってどんなに胸が高鳴ったか・・・

でも・・・やっぱり哀しんだあの蘭さんの顔を思い浮かべると、どうしても「好き」のたった二文字がいない

でもその二文字を工藤君の耳に入れてしまえば、絶対工藤君の顔には笑いが生まれ、絶対蘭さんの顔には悲しみが生まれるに違いない

そう、絶対天秤になっている

どちらかが嬉しい上に行けば、もう片方の人は絶対したの悲しみに落ちる

昔から決まっている事

そうならないためには、両方に絶好の幸せを与えず、二人ともが真ん中でいることでしかない

または、二人ともが絶好の幸せを感じ、平行でいるべき

私は消えるべき・・

この二人の件から、外れるべき

だから、嫌いだといってしまふべき

工藤君が、気付いてしまう前に

私はベッドに転がり込んだ

枕に左頬をつけ、腰の辺りにシーツをかけた

もうお昼だというのに何も食べたくない

何をする気にもなれなくて、ただ時間が過ぎていくのを待っている

多分・・・「後悔」なんだとおもう

そのとき携帯に電話がかかってきた

ディスプレイには「吉田 歩美」と表示されている

「もしもし・・・」

「哀ちゃん！」

コナン君を振ったってほんとう?!」

「はぁ・・・?」

第一声の「哀ちゃん」で耳から電話を離してしまった

「誰にきいたわけ?」

「コナン君が、哀ちゃんにふられたってね」

「あら、そう」

「なんで?」

哀ちゃん、コナン君がすきなんでしょ?!

ならどうして?!」

「・・・・・・」

あのね・・・

人間には、たとえそれが本心でも、言っちゃいけない時があるのよ

今回はそのパターン

その理由は、あなたたちは知っちゃいけない

前に言ってた、「パンドラの箱」と同じ

この件は、誰にも言わないで置いて」

「そんなの・・

出来ないよ！

歩美はコナン君と哀ちゃんの友達だよ？！

二人が何かを隠してたら、知りたいとおもう！

哀ちゃんは、コナン君が好きなのにそういわない

コナン君は哀ちゃんが好きだけど哀ちゃんに好きじゃないといわれ

て落ち込んでる

本心でも言っちゃいけないことがあっても、思ってることはちゃんと
と言わないと、後悔しちゃうよ！」

「人の話に口出ししないで！」

後悔？

人生ってそういうもので成り立ってるじゃない！

とにかくこのことはあなたの心のそこにしまっておく事ね！」

私はそのまま切ってしまった

人生

「ふん・・・」

私は携帯の通話ボタンを力強く押し、こぶしを握りベッドを殴った

「ううつ・・・」

いつの間にか目の前はぼやけてきて、気付けばベッドは少しずつぬれてきた

涙

体重を支えている手にも涙のしずくが落ちてきて、息も荒れてきた

「後悔」なんて、どうせ私の人生のいたるところに漂っていて、今もそれで一人、失った

そうよ・・・思い返してみれば、あの時・・・お姉ちゃんが組織に加わって私と普通の生活をしようという

はじめた時、絶対にダメだと、いえばよかった

大丈夫だからそれだけはしないでといえよよかった・・

どうせ私は「普通」の人間じゃないから

電話がふるえた

メール

ディスプレイは 工藤新一だった

件名

メッセージ

俺 お前の事諦めないから

たったそれだけだった

多分、吉田さんが彼に反応を電話したんだと思う

私は送信した

だからなんなのよ

たったそれだけ

メールって言うのは電子手紙みたいなものののに、これが本当の手紙なら、紙と切手の無駄になる

今は話す代わりみたいに使われているけど

これで、話せばいいのに

「好き」っていいたい

いえたら、どれだけ楽になれるか

肩の荷が下りるのに

多分、お姉ちゃんが今いて、このことを知っていたら、きっと怒鳴られるな

私の流さないあたたかい涙を流して、きっと・いつも怒鳴らない分、声をあげて

私はただ涙も流さないで無表情で見ている、絶対その分の涙をお姉ちゃんは流すから

「恋人の一人や二人つくりなさい」か・・

そんな事、覚えた覚えはない

そんな事、人生でしなければいけないなんて、人生のプログラムにあつたはずはない

恋人をつくらなければいけないなんて、人生で絶対にやらなきゃいけないことじゃない

だって、つくらなくても私は20年間近く生きていたんだから

どうせ恋愛なんて、思い違い・・

私には、関係のない事

人生（後書き）

哀ちゃんたったひとりで面白くない

次回からもっとちゃんとしたものをつくりたいとおもいます

応答

見慣れた天井

起き上がってみると真っ暗だった

外は薄暗く、部屋の中は明かりがなくて真っ暗

きつといつの間にか眠ってしまったのだろう

いい加減何か食べなきゃ・・

適当にスリッパを履いて部屋を出ると、慣れていない光が目にし込んできた

「ん？」

はよ」

いつもの江戸川君・・

「・・・・・・・・」

「無視すんなよ」

「あなたに受け答えいなければいけない義理なんてないわ」

「ひでえな」

「あ、そ」

「今、何時？」

「6時26分」

「夕飯は？」

「まだ」

「じゃあ適当にお願い」

「私は部屋でたべるから」

「おい！」

「・・・」

ブーブー

私の携帯がふるえた

メール

私はそれを返信して地下室にむかった

応答（後書き）

短すぎる

告白

地下室の反対側のドアが開く

「いらっしやい」

「ううん

こっちこそ、突然ごめんね
哀ちゃん」

「いいのよ・・・」

来たのは蘭さんだった

さっき家の前まで来たんだけどどうすればいいか私宛にメールが来た
だから裏口から地下室に来てくれと返信した

「で、どうしたの？」

「私、気付いたの

コナン君は新一で、哀ちゃんは、わからないけどたぶん小学一年生じゃないって」

「どうして・・・？」

それを？」

「つてことは、その通りって事でいいんだよね？」

「ええ・・・」

「気付いたのは、前に二人の話を聞いちゃったから

その話では、哀ちゃんはコナン君を「工藤君」コナン君は、新一と同じ口調だった

哀ちゃんのほうに確信はなかったけど、コナン君と同じようなレベルの事を話していたから、小学一年生じゃないって事だけは、気付いた。

だから」

「へえ・・・

で？

他にも・・・いろいろ聞きたいことあるんじゃない？」

「なにもない

聞いてもしようがないもん

ただ、どうして新一が戻ってこなかったのか、知りたい」

「解毒剤をつくれなかったから

私が工藤君を幼児化させたのにその解毒になるものを作れなかったから、工藤君は江戸川コナンのままになってしまい、あなたの元に
戻る事ができなかった」

「ふうん

まあいいや

でも哀ちゃん、聞きたいの

どうして新一はそれでもいつてくれなかったの？

もう危害が加わる事なんてないよね？

なのにどうして本当は自分が工藤新一だと、私だけにでも教えてくれなかったの？」

「・・・」

あなたを忘れてしまったから・・・

もう、あなたの事を・・・思っていないから・・・」

「え・・・？」

「自慢じゃないわ

私、好かれたの

工藤君に

告白もされた

でも、私は答えなかった

それは・・・」

「私に悪かったから・・・

私のことを考えて・・・だよね？」

「なっ・・・」

「もうお見通し

早く素直になりなよ」

「でもっ・・・」

「わかってた

二人がそんな秘密を持っていることを知る前から、コナン君は哀ちゃんが好きで、哀ちゃんもコナン君が好きなこと

でも、その後この事実が出てきて、やっとわかった

コナン君のほうははっきりしなかった

でも、哀ちゃんは私に悪いと思っていたんでしょう？

私がまだ新一という人間を思っているのに自分が好きになるなんてありえないことだとおもったんでしょ？

哀ちゃんは、そういう心の持ち主だもんね」

「ちが・・・う・・・

そんなんじゃない・・・」

「強がっちゃだめ

強がりな私に言える言葉じゃないけれど、強がってたなら、何もかも、

手に入れられなくなっちゃうよ」

「わかってる・・・

でも・・・

やっぱり返さないと・・・

わかってるなら告白しなさい・・・

江戸川コナンⅡ工藤新一だということをわかっているのであれば、
告白しなさいよ

自分は何もかも知った上で好きだからって

きつと、まだわかってくれるわ」

これでいいの・・・

事実

「恋人いるんだ」

彼女の口から出てきた言葉は驚くものだった

「新一も知らないんだけどね、同じ歳の人

学校でたまたま知り合って、付き合い始めたの

告白されてね、最初は戸惑ったんだ

二人の事を知った後だったけど、本当のところそのとき新一のこと、ちゃんと諦めがついてなかったから

でもさ、人生って一度つきりだから、たくさん恋をしたいんだよね

たった一人にとわれたまま、人生を終わりにしたくないから

新一の事は、諦める事にしたの

それに、諦めがついていなくても、他の人と付き合うことで踏ん切りがつくと思ったから

今はその人とうまく行っている

だからさ、もう責任感じて離れる事なんてないんだよ・・・」

「あなたも、本当にお人よしね・・・

あなたは憎まないの？

私のこと

もしも私がいなければ、あなたたちはそのまま仲良くなっていたのよ?!

なのに、そのことについて、ほっとけるの?!

私のこと、許せるの!？」

「許してはいないんだよ・・

完全に、哀ちゃんのこと、許してはいないんだ

でもさ、ずっと同じ人の事恨み続けたって、しかたないの

さっきもいったとおり、人生って一度つきりだから、一人のこと恨み続けたまま人生を終わらせたくないの

それに、哀ちゃんを恨んでも新一は私のこと思っではくれないし

今は私も新一の事、恋愛対象としてみてない

だからもう、哀ちゃんは私に縛られる事なんてないんだよ・・」

「ありがとう

でも・・・それ、受け取るのに時間がかかりそうだわ

受け取れるとも限らないし

あなたの気持ちはよくわかったわ」

「よかった

じゃあ私帰るよ」

「じゃあ・・・」

蘭さんはそのまま地下室の反対通路に出て行った

やっぱり蘭さんは優しい心の持ち主だから

私みたいに人のものにまで手を出すような悪い人間じゃないから

きつとそんな事をいえるんだと思う

そんな事を考えてそういう気持ちを考えられるんだと思う

でも、そういう気持ちがあつてそういう風にかばってもらえたとしても、

私はその気持ちに甘える事なんて許される事じゃない

私はそういう気持ちにこたえて、甘えていいような身分の人間じゃない

私は、ただ単に刑務所に入っていないだけ、警察に見つかっていない、ひとしほし殺人者でしかないんだから・

人間の身分なんて関係ないなんて嘘

みんな平等なんて嘘

どうせこの世の中には差別が漂っている

差別で世間、世の中というものは成り立っている

たとえ私の意志でやっていたことじゃなくても

私が飲ませて殺したわけじゃないにしても、

罪のある人間に代わりはない・・・

だから私は、被害者の工藤君に・・・いえ、まして幸せになるなんてこと・・・許されない・・・

私はそう考えてリビングに出た

「灰原・・・」

「・・・」

「お前さ・・・俺の事、好きなんじゃないのか？」

「どうせ、蘭に申し訳ないとか思ってたんだろ？」

罪の意識があるんだろ？」

「・・・」

そうよ・・・

あなたの事が好き・・・でも・・・」

「ダメだから・・・」

「そうよ！

だから何だっていうの？

私があなただの事を好きだからといって、あなたと付き合わなければいけない理由なんてないわ！」

「お前に逃れて欲しいんだよ・・・」

縛られない一人の・・・人間として・・・罪の意識から・・・」

「ない・・・」

逃れられるわけがないじゃない！

だって、お姉ちゃんを殺したのは・・・

この私^{みやのしほ}なんだから!!!!!!

事実（後書き）

とても原作からかけ離れます

一体の死体の裏の裏

「は・・・？」

お前が・・・明美さんを・・・姉さんを・・・殺した・・・？」

「そうよ！」

「なわけ・・・ねえだろ・・・おまえが・・・どうし・・・て・・・」

「あの時・・・本当は私がいた・・・」

そして・・・撃ち殺せといわれたの・・・

殺さなければ、私が殺されると・・・

それが怖くて・・・

撃った後も、お姉ちゃんはいってたわ・・・

これでよかったのよって・・

「で・・でも・・

どうして助けてくれなかったのって・・」

「撃ちたくなかった!!」

だから、それよりも先に行動を把握して私たちを止めて欲しかったのよ!!!!!!

私が歯向かったのも、どうしてそんな事をさせたのか・・撃った後、私は気絶してそのまま研究所に運ばれていた・・

やりたくなんかなかったけれど・・

言い訳・・よ・・

私があの時死ねばよかったんだわ・・」

「ちがう・・

たとえそのときお前が撃たずにいても、いずれ姉さんは殺されていた・・」

「だとしても!・!」

彼女は・・ずっと否定し続けた・・

一体の死体の裏の裏（後書き）

めちやくちやだな・こりや・↑（お前さんのせいだな）

仕方なかった

そのまま灰原は泣き崩れ、仕方なく時計型麻酔銃で眠らせてベッドに運んだ

眠ってから30分後、ゆっくりと目覚めた

「ここ・・・は・・・？」

「お前の部屋」

「えっと・・・」

「泣き崩れて・・・麻酔銃で眠らせて連れてきたんだ・・・」

「そう・・・」

「ごめんなさい・・・」

「あんな事、あなたに八つ当たりしていいわけがないわね・・・」

「あれ・・」

「本当よ

事実」

「さあ、金をわたしてもらおうか」

「ここにはないわ

あるところに預けてあるの

その前に妹よ

約束したはずよ

この仕事が終われば、私と妹を、抜けさせてくれるって」

「ああ連れてきているさ

ウォッカ！」

「出る！」

「ちょ・・・」

「志保・・・」

「・・・」

「シェリー」

撃て」

「え・・・？」

「ごめんなさい・・・」

私、お姉ちゃんを撃つしか、方法はないみたい」

「じゃあ・・・初めから・・・あなたたち・・・」

「ああそうだ」

撃て、シェリー」

「・・・」

ダン！

バタ・・・

「志保・・・よかったのよ・・・これで・・・」

「・・・」

「ちっ・

シェリー・

運べ

ずらかるぞ」

「わかりやした」

「・・・」

「灰原？」

「結局死が怖くて撃ってしまった・

これがいいわけよ・」

「灰原・・・」

「自分で殺したくせに人のせいにして・・・」

あなたにつかみかかって・・・

結局私は、自分を守るためにお姉ちゃんを捨てた・・・

最低・・・」

「仕方なかった・・・」

撃つ事でしか、自分を守れなかった・・・

それ以上でもそれ以下でもない・・・

しかたない・・・ことだ・・・」

「仕方ないですまないわ・・

仕方ない事で、人を殺した事を済まされたら、困る・・」

「仕方ない・・事だ・・」

俺はおもうがままに灰原の肩を抱いた

「くど・・く・・ん・・」

「好き・・だ・・」

「私も・・

好き・」

仕方なかった（後書き）

いろいろ勝手な妄想になっていますがご了承ください

養子

「本当・・・か？」

「嘘ついて、どうするの？」

「ありがとう・・・哀・・・」

「・・・」

「無視かよ・・・」

＊＊

「哀、今日母さんが来て、話があるんだと」

「そ・・・そう・・・」

「哀ちゃん」

「あ・・・有希子さん・・・」

久しぶりです・・・」

「久しぶりね」

今日は、二人に大事な話があったの」

「話・・・とは？」

「二人に、うち・・・工藤家の養子にならないかしら？」

「はあ？」

工藤君がバカみたいな声を出した

「うち、新ちゃんが、世間的に死んだ事になって、いろいろと寂しいから、優作が言い出したんだけどね」

「でも・・・」

「いーんじゃねえか？」

「だったら」

「でしょ？」

「二人も、ラブラブみたいだし」

「ちょ・・・」

「そんな・・・」

「隠さなくていいのに♪」

「母さんテメエ・・・」

「なあに？」

「もういい」

「哀ちゃんは、どう？」

「私は・・・いいですけど・・・」

でも・・・」

「でも？」

「いいんですか？」

私が・・・その・・・」

「いいの

いいから言ってるんだから」

「なっ？」

「ええ・・・」

「で、二人には世間的に成人・・・したら、結婚してもらいたいの」

「・・・わぁーったよ・・・」

「・・・はい・・・」

「それで、名前ね

二人の名前は、新一と、志保ね」

「「は？」」

「養子に入るついでに、証人保護プログラムを受けましょう？」

念のため、一応組織の秘密を知っているって事で、FBIの人から、

電話があつたの

で、苗字の方は工藤になるじゃない？

だとして、下の名前をね、新一と志保、元の名前にしたらどうかなあつて

一応江戸川コナンと灰原哀の名前は、世間に知られているってこともあるし、あの名前は、もう二度と、名乗れなくなる

それでも・・・いいかしら？

FBIの人は、本人がそれでいいのであれば、かまわないって

どうする？」

私達はうなずいて

「そうする（します）」

「やったあ！」

これで哀ちゃんも私の娘になるわ♪

女の子欲しかったのよねえ」

なんとなく・・私に対する親切じゃなく自分でも楽しんでいる気がする

「じゃ、話は終わり

また二人でやってなさい♪

私は博士の家にとまるから、二人はあの家で」

「いいのかよ」

「いいのよ

かわいい娘のためならね♪」

娘って・・

「俺は？」

「おまけ♪」

「はぁ」

「いき・・ましょう？」

「んだな」

私達は大きな家に二人きりだった

結局工藤君の自室に入った

さすが高校生の自室なだけあり、十畳の大きな部屋だった

「やっと邪魔者は消えたな」

「狼」

「ん？」

「別に」

＊

二人は部屋の真ん中にぺたりとすわり、何も言わず、何の合図もなく、顔を近づけキスをした

しばらくしてコナンはゆっくり顔を離した

「これで終わり？」

「もっとしてほしかったか？」

「かもね」

「なんだよ」

「さあ」

「いっしょに寝るか？」

「襲う気？」

「なわけねえだろっ！」

「どうだか？」

「寝ようぜ」

「いいわよ・・・」

「マジ？」

「やっぱり襲う気なんじゃない！」

「バーロー」

んなわけねえだろ！！」

「はいはい」

二人はぷつと笑い、二人の仲はぱあつと花を咲かせた

養子（後書き）

自分の妄想で繰り広げられた話になってしまいました

すみません

二人の静かな夜（前書き）

ちよつとエロいです

苦手な方は逃げてください

二人の静かな夜

大人用の大きめなベッドは、子供の体の二人には楽に寝られた

「まだ何かしたいわけ？」

哀の背中にコナンの腕が伸びた

「ちょっと」

そのままコナンは哀を起き上がらせ、抱きしめてキスをした

コナンが少し哀の口の中に舌をいれると哀の舌は水のない金魚のよう
うにぴくぴくと動く

何度も二人は角度を変え、そのたび二人の鼻はぶつかる

だいたって二人が顔を離すと二人の唇は真っ赤になっていた

「息苦しいじゃない・・・」

「オメエ抵抗しねーんだからいーじゃねえか」

コナンはそういつて哀を抱きしめてベッドに倒れこむ

ちょうど姿勢的に哀がコナンの胸にいる

真っ白なシャツに哀の左頬がつく

「このままやるか？」

「エッチ」

「男はみんなエッチなんだよ」

「へえ」

するとコナンの腕は動き始めた

「ひいっ・・・」

腕は哀の体のいろんなところに伸び、
どんどん触れられていく

「や・・・めて・・・」

触りおえ、手を離れた

「何のつもりよ」

「我慢できなかったんだよ」

「エッチ」

「エッチだよ俺は」

「あ、そう

じゃあ私はエッチな人間に恋をした事を後悔するわ」

「自由」

「にしても、何されるかわからなくて眠れないじゃない」

「大丈夫

なんもしねえよ」

「どうだか？」

「お休み・・・志保」

「おやすみ・・・新一」

二人はそのまま眠りについた

「愛してる・・・志保・・・」

哀が浅い眠りに着いたころ、コナンは静かにそうつぶやいた

二人の静かな夜（後書き）

短い上いやらしい・

私最低です

朝

ゆっくりと目を開くと、懐かしき天井が目飛び込んでくる

あ・・そっか・・

昨日このベッドで寝たんだっけ・・

哀と・・

ところで哀は？

と思って布団を覗いてみた

そこには・・

「へ？」

俺の胸元に顔を向けてすやすや眠っている哀がいた

顔が出ていないのに苦しくないのか？

そつと哀の手に触れてみると、こんな中に眠っているわりに冷たかった

冷え性・・・？

哀と並ぶくらいのところに寝ていた

布団は俺たちの肩のあたり

口紅もしていないのに赤い唇・・・

かすかに口は開いていて、口付けたくなつた

「哀、起きろよ

哀・・・」

起きねえ・・・

そう思ってそつと唇に己のそれを合わせると、哀の緑色の瞳が開いた・・

「ん・・」

「はよ」

「寝てるのにキスしたら息苦しいじゃない・・

朝？」

「まあ・・

でも、もう9時だから・・お世辞にも早起きじゃねえな」

「そんなに・・？」

「っていうか・・有希子さんたちはどうしてるかしら・・？」

「ちょっといきましょ」

「んー」

俺たちはさっさと着替え、隣の家に行ってみた

家に入った時の俺たちはどうと・

「「え・・？」」

目の前にはテーブルに腕を置き、それを枕にして眠っている二人がいた

テーブルには数本のビン

そしてその下には袋に入れられているが、たおれている空き瓶

「酔いつぶれたな」

「そうね」

「ん・・」

新ちゃんに哀ちゃん？

痛った・・

水

水ちようだい

あ、いいもんみつけ」

「あ、それは・・」

母さんは目の前にあるグラスにそそがれた液体を飲み込んだ

「え？」

やだ・・・これワインじゃない！」

「大丈夫・・・なわけないか・・・」

「つたりまえよ

あーにしても久々にお酒飲んで楽しかった」

二人も飲む？」

「あのな、もうすぐ成人だからって、体は酒に耐えられねえんだよ」

「そんなの関係ないじゃない」

でも、二人にはまだ早いわね」

「でも、大丈夫ですか？」

結構飲まれたみたいですけど・・・」

「そうね・・・」

私も結構飲んだけど、一番飲んだのは博士のほうよ

突然飲み始めちゃって

絶対3本は飲んでるわ」

「お酒は控えなさいって言ったのに・・・」

これからお酒なしカロリーなしね」

「ハハハ」

「絶対また太ったわよ

最近やっとやせ始めたのに・・・」

「ごめんなさい

私が誘って・・・」

「でも、のりに乗った博士も博士です・・・」

「哀ちゃん、本当に安心だわ・・・」

きつとこの大バカ推理の女心音痴息子の介にちゃんとした生活させてくれるでしょ

あんしんできるわ」

「おい、大バカ推理の介から女心音痴まで増えてるぞ」

「気のせいよ

新ちゃんが大バカだから聞き間違えたんだわ

ねえ哀ちゃん」

「おい、哀

ちよつとはフォローしろ」

「ええ、するわ

有希子さんのいうとおりなもの

有希子さんをね」

「おい」

「だってあなた、本当に女心に音痴なもの

好きの言葉を受け取る前に何度もキスをする人がいるかしら？

あ、そうだわ

昨日の事、有希子さんにいっちゃおうかしら？」

「やめろっ！！！！」

「慌ててるわ」

「なに？」

「昨日の事って」

「実は・・・」

「やめろー！！！！」

「それ以上言うな」

「ちょっと新ちゃん

「私二日酔いで頭痛いんだから大声出さないの」

「大声ならいくらでも出るぜ」

「大丈夫ですか？」

紅茶淹れます？」

「お願い

バカな息子のせいで頭痛がひどいわ」

「哀」

「なに？」

「誰の味方だ」

「もちろん・・・」

「・・・」

「有希子さん」

「よね♪」

「ええ・・・」

「俺このまま死ねる・・・」

「かまわないわよ？」

「ひどい！！」

「別れる？」

「ヤダ」

「あ、そう」

「ホント、二人見ると飽きないわね

あ、ありがとう」

「いえ・・・」

「こんな大騒ぎして博士よく寝てられんな」

「博士は、お酒飲んでつぶれるといつまでも寝てるのよ」

「ふーん」

朝（後書き）

歯切れが悪い上、内容が面白くなさすぎ

見なくてもいいかも

話

「博士、博士」

「ん・・哀君か・・」

「『哀君か』じゃないわよ！

お酒は控えなさいっていったじゃない

これからはお酒なしカロリーなしよ！

毎朝ジョギングもね」

「なんじゃて！？」

博士は飛び起きた

「当たり前じゃない

勝手にこんなにお酒飲んで、酔いつぶれて

有希子さんにも迷惑かけてるじゃない！」

「でも・・」

「今日は二日酔いなんでしょう？」

休んでていいから明日からは毎朝ジョギングよ

そして今日から野菜料理ね」

「いいじゃないか・・・」

わしもたまにはカロリーの あるものを・・・」

「たまじゃなくて、博士の場合いつものよ

私も付き合うから、ちゃんと野菜料理を食べるようにしなさい」

「はぁ・・・」

「おい、それはやりすぎじゃねえか？」

「バカね、やりすぎでもこのままじゃ60代で死ぬわよ」

「怖えーな」

「あなたも博士みたいに太ったら同じ生活よ

でもあなたの場合、いつも事件に走りっぱなしで博士みたいに太ら

ないでしょうけど

博士みたいにならないうちで家で研究ばかりしているようじゃ、とてもやせられないわ」

「ひどいのお・・・」

「まあ、私が養子に入ってこの家を出てもどうせすぐ隣

毎日顔を出すから絶対ごまかしはきかないわ

こっそりメタボって死んでも知らないわよ」

「はあ・・・」

「ため息二回目」

「したくもなるわよ

でも、この調子だと新一の健康もちゃんと守ってくれそうで安心だわ

新ちゃん、すぐに無理して前に事件にいつてて、学校二日休んで大量の事件に走って事件現場で倒れたんだから」

「そんなエピソード初耳だわ

ねえ、工藤君？」

「うゝ」

「でもこれからは警部に一度家に強制帰宅させるように頼むから、安心してください」

「ええ、哀ちゃんに任せるわ」

「鬼」

「なにかいった？」

「なんでもねー」

「有希子さんも、二日酔いなら家で寝たらどうですか？」

「ううん」

「哀ちゃんと話があるから、哀ちゃんのお部屋、いいかしら？」

「ええ・・・」

「ちなみに新ちゃんはだめよ」

「おい」

「大丈夫・」

確かあの部屋は防音だったはず・」

「なら安心」

「いきましよう」

「ええ・」

（何の・話かしら？

私の過去のこと・？）

はき捨てたこと（前書き）

長いです

はき捨てたこと

部屋に行くと、ひとつの小さな台を挟んで私達は向かい合っていた

「それで・・・その・・・話というのは？」

「今回の話、哀ちゃんにはちょっと辛いかもしれないんだけど、正直に・・・答えて欲しいし、ちゃんと私の話を聞いてくれる？」

「ええ・・・もちろんです・・・」

「・・・結論・・・で言うと、哀ちゃん・・・あなたの・・・過去の話なの」

「・・・は・・・はい・・・」

明らかに私の声は震えていて、誰にでもそれは確認できた

腕も震えていて、明らかに緊張していることは誰にでもわかる状態だった

それをわかっていて、それでもとめる事が、ポーカーフェイスが聞かない状態だった

「緊張しないで

何も、今哀ちゃんに説教をしたいわけじゃないの

私からもいろいろと、言わなければいけないことがあって・・・」

「え・・・ええ・・・」

「そうね・・・初めから何を話そうかな・・・

哀ちゃんの、お母さんの話

お母さんの名前、知ってる？」

「ええ・・・

知ってます・・・」

「お名前は？」

「宮野・・・エレーナです・・・

旧姓は知りません・・・」

「そう・・・

宮野エレナさん・

この人で、間違いないかしら？」

有希子さんは一枚の写真を、カバンから取り出し私に見せてくれた

そこに写っていたのは、私が組織に乗り込んだ後、FBIに渡された写真に写っていた女性と同じ人だった

「・・・」

そうです・

でも・・・どうしてこの写真を？」

「・・・」

エレナさんとは、あまり面識はないの・

でも・・・シャロンから、いろいろ聞いてるわ

シャロン・シャロン・ヴィンヤードよ

あなたも知っている・・・ベルモット・・・と組織内部では呼ばれていたらしいわ・

クリスとも同一人物で、あなたがおびえていた、ベルモットよ」

「ベルモット・・・いえ、シャロンのことは、よく知っています

でも、どうして彼女が私の母のことを？」

「どうして・・・あなたに母のことを？」

「シャロンから聞いたんだけど、実は、結構仲がよかったらしいのよ

エレーナさんとね

それに、あなたが小さい頃、母親のようにしてくれていたのはシャロンなんでしょう？」

「ええ・・・そうです・・・

理由は知らなかったし、知りたくもなかったけど、幼い頃私を娘のようにしてくれていました・・・」

「ええ・・・

シャロンは、幼い頃から子供が産めない体で、でも子供のことは好きだったらしいから・・・

で、シャロンとエレーナさんはとても仲がよかったらしくて・・・

エレーナさんが亡くなった後、自分から、母親役を買って出たそうよ

それで、あなたがシャロンからおびえていたのは・・・

シャロンが人を殺す場を見てしまったからでしょう？」

「そうです・・

出かけていた時・・シャロンが突然襲撃され、私を守るために突然銃を取り出して、その人間を撃ち殺した・・

そのとき私はまだ物心がつく前だったけど、それだけは今でも現実のように覚えています・・

それ以来、私は彼女から拒否するようになって、結局、違う人に面倒を見てもらうようになりました・・」

「そう・・

そのことを、私に言ってくれたの

組織のことは教えてくれなかったけどね

それで、その女の子、宮野志保ちゃんといわれた女の子の写真を私にくれたの

というより、私がなんとなく欲しいって頼んだのね・・

それで、何年もたった最近、あなたの事を博士に相談されたの・・

博士も、女の子のことは、自分が男だから、わからなくて、私しか相談できるような相手もないって、電話をもらったの・・

事情も、教えてくれた・・・

それで、自分の研究仲間の一人、宮野エレナさんという女性の娘だということも・・・

それで、その名前を聞いて、その女性がイギリス人だって言うから、その女の子、あなたの写真を送ってもらったの・・・

そしたら・・・驚いたわ・・・

今の方が体としても成長しているからちょっと違ったけど、シャロ
ンにもらった写真と、そっくり同じだったから・・・

しかも、あなたの本名は、宮野志保っていうらしいし・・・」

「そうですか・・・」

「区切りが悪いけど、ほかにも・・・

あなたに・・・感謝してるの・・・」

「え?!」

「新ちゃんがあの日、死なずに生きていたのは、あなたの薬があつ
たおかげでしょう？」

もしもそのときその薬がなかったら、きっと拳銃で殺されてた・・・

その場に警官がいたから、拳銃はつかわなかったってことらしいけど、きっとその組織なら、そのまま新ちゃんをかつぎこんで自分たちのところで殺したと思う・・・

でもそのときちょうどいいことにあなたの作った薬があったおかげで、新ちゃんは拳銃で殺されずに済んだ

そうでしょ？」

「違います

私の薬がそこにあつたのはたまたま奴らがあの薬に興味を持って暗殺に使ったから

もしそんな事がなかったら、きっと今言ったことと同じ事をしたはずです」

「ううん・・・

そうだったとしても、あの薬がなかったら、絶対今頃新ちゃんはこの世にいない

このあたりの人間はみんな心に傷と深く付けられ、まだ涙が耐えなかったはず

それがなかったのは、ただの失踪で済んだのは、あなたの薬のおかげ

結局世間的に死んだ事になったけど、少しは軽減できた

突然死んだんじゃないくて、失踪って事で終わりになった

それに、本人は、影では生きている

新ちゃんの命の時計は、まだ動いている」

「違うわ！

工藤君の時計は、工藤新一の時計は止まったまま！！

これからずっと、今までの栄光を捨てて、今までの出来事も、友情も、すべて捨てて江戸川コナンという別の人間になって生きていかなきゃいけない、すべて私が切り離れたもの！」

「違うわ

新ちゃんは、今も笑顔でいられる」

ダメ・・

「どうせ、奇麗事並べたって心じゃこんな奴消えればいいって思ってるんだから！」

ダメ・・ダメ・・ダメ！

ストップ！

「どうせ、私なんて邪魔だ

消えちまえて・・・工藤君だって恨んでるに違いない！」

「違う・・・」

私は部屋の隅っここに行ってしまった・・・

「こっ
ちに来るな……！！！！！！！！！！」

はき捨てたこと（後書き）

展開が多すぎてなんか張り切りすぎた小説みたいな事になっている

実際そうですが・

面白くなさすぎる・

タイトル考え中

有希子さんは硬直していた

当たり前だけど

こんな事をいいたいわけじゃないのに・・

こんな事はいいたくないのに・・

自分がどれだけ優しい人にどれだけひどいことを言っているかはわかっていた

「あ・・哀ちゃん・・」

私はきゅっと唇をかみ締め、唇から一筋の血が流れる

有希子さんは少しずつ私に近づいてきた

そしてゆっくり私を抱きしめた

「・・・・・・・・」

「落ち着いて・・・哀ちゃん」

「・・・」

「ごめんなさい・・・」

＊＊

哀ちゃんは何もかも崩れたように涙を流していた

そして、私の胸の中で眠っていた・・・

私はそっと部屋のベッドに寝かせて、部屋を出た・・・

タイトル考え中

私が部屋を出ると、そこには二人がいた

「アイツは？」

「泣いて寝ちゃった・・・」

「泣いたって・・・母さん哀に何言っただよ！」

「新一は知らなくていいことよ

はいはい、じゃあ」

私は電子レンジでタオルをあつたためたものを持って部屋に行った

哀ちゃんはずでに起きていた・・・

「哀ちゃん」

「有希子さん・・・私・・・」

「寝ちゃったのよ

さっきの事なら、気にしなくていいの・・・

私が突然話しかけた事だもの

哀ちゃんは悪くないの・・・」

「すみません・・・」

「はい、目に当てて

じやなきや、真っ赤になっちゃうわ」

哀ちゃんの目は大して泣いてはいないものの、その後こすったのか赤くなりかけていた・・・

「ほら、よくなったわ」

「すみませんいろいろと・・・」

「ううん

これからは私が哀ちゃんのお母さんになるから、甘えていいの・・・

哀ちゃんはそういうこと、わからないかもしれないけれどね」

「・・・」

「これからは、志保ちゃん・・・かな？」

「・・・」

ありがとうございます・・・

私を・・・その・・・」

「養子にしてくれて？」

いいの・・・

本当のところ、私も楽しんでるんだから」

「そうですか・・・」

「そうよ♪」

タイトル考え中（後書き）

意味不？

お出かけ

それから私は部屋の中にいて、なんとなくリビングに出られずにいた

コンコン

「はい・・・」

ゆっくり開いたそこには工藤君が立っていて、ニツと笑っていた

「行くぜ」

「どこに・・・？」

「デパート

米花ショッピングモール」

「は？」

「母さんがみんなでショッピングに行きたいってよ

俺、出るから着替えろよな」

たったそれだけをいい出で行ってしまった

私は言われたとおりに着替えて、部屋を出ると、すぐに有希子さんの車に乗せられた

博士は二日酔いでパスで、3人だった

「その服、似合ってるぜ」

「そう？」

この服は博士が私が来た日に、まず子供サイズの服を買わなければいけないと張り切って子供服店に行き、買ってきたワンピースだった

あの時は、サイズ間違いで少し大きかったけれど、この体の身長が伸びて、着れた

デザインは白に黒のドットで、私には二度と縁のないものと思っていたけれど、今日クロゼットを見て、ずっとビニール袋をかけられておいてあるままのワンピースを見ていたらなぜかその服を着ていた

事実のところ工藤君にこのワンピース姿を見てもらいたかったのがあるけど・・・

しばらくたつと目的地に着いたらしく、私は二人についていく形だった

「じゃあ、二人はここにいて

なんかあったら私の携帯に電話してね

私、上の婦人服のとこ行くから」

といって有希子さんはさっさと行ってしまった・・・

「元からこうするつもりだったな」

「そうね」

「ンじゃ、俺が服を選んでやるよ」

「なっ・・・」

「大丈夫、母さんにクレジットカード預かってるから」

「クレジットカード預けてもらえる子供がいるかしら？」

「いる」

「どこに」

「ここに」

「あっそ」

工藤君はそれを聞き終わる前にさっさと行ってしまい、服をひとつ
とっては何かを言っている

私はそれをただただ眺めていた

スカウト!?

工藤君は小さな体で女の子の服を見ては戻し、見ては戻す・・・それを繰り返していた・

周りでは、いろんな大人の人がいて、私たちを見ていた

「ねえ、お姉ちゃんとそこのお兄ちゃん」

一人の女の子が声をかけてきた

「「はい？」」

「二人、もしかして兄妹？」

「いいえ」

「じゃあ・・・」

「恋人です★」

工藤君が私の首に腕をかけて自信満々に言った

「ちょっと・・・」

「やっぱりそうなの？」

「やっぱり・・・？」

「お二人、似ていないから

私、実はこういうものなんだけど」

工藤君が名刺を見てつぶやいた

「子供服屋・・・この店の人ですか？」

「ええ・・・」

この店のカタログや何かを作る部門なの・・・」

「それで？」

「二人に、カタログの一面に載ってもらいたいなあって思って・・・」

「「カタログ？」」

「ええ・・・」

もうすぐ新号のカタログの製作をするんだけど、前にモデルだった女の子が突然ケガをしていらい撮影が出来なくなってる・・・

それで、この店に来るお客さんを見て、あなたたちならいいかなあって・・・

どう？」

「でも私・・・」

「じゃあ、母さんに電話するので、待ってもらえますか？」

「ちょっと・・・」

工藤君は私の了承を受け取る前に有希子さんに電話を始めた

「あ、母さん？」

ちょっと大至急俺たちのいる店に来てくれないか？」

それから少したって・・・

「どうしたの？新ちゃん」

「実は、この店のカタログ部門の人に、声かけられて

カタログのモデルにならないかって・・・

んで、保護者の母さんがいねえとダメだろう？

だから呼んだんだ」

「本当？」

スカウトされたの？

さっすが私の娘！

で、やりたいの？」

「ああ」

「でも・・・」

「心配ねえって」

「私が嫌なの」

「へ？」

「だって・・・」

その・・・

友達とかにも知られちゃうわけじゃない？

そうすると・・・いろいろと不都合が出る・・・」

「でねえよ

いいだろう？」

「わかったわよお・・・」

「で、よろしくな」

「ええ・・・」

「あなたは？」

「私、この子の母親なんです・・・」

「この少年の？」

「ええ・・・」

それで・・・」

「引き受けていただけのしょうか？」

「はい、いいですよ」

「では、また後日お電話しますので、電話番号を・・・」

「はい、これです」

有希子さんはどこからか持ち出した紙を差し出した

「はい・・・」

その女性はどこかへ歩いていった・

スカウト！？
(後書き)

めちやくちや
W
W

?

「早いうち、手続きをしなくちゃね」

「え？」

「養子よ・・・」

早くしないと、存在しない少年と少女をスカウトしたってことにな
っちゃうじゃない・・・

とにかく優作に頼んで・・・」

有希子さんはまた携帯を出して誰かに電話していた・・・

「大丈夫・・・」

証人保護プログラムの手続きは始めてもらうから・・・

で、お買い物は進んでる？」

「んじゃ、これ着てみろよ」

「え？」

差し出されたのは、水色のレースワンピースだった

「ええ・・・」

私は試着室で着替えた・・

「出来たわよ」

私はカーテンをあけると二人が驚いたような顔で見ている

「え？」

「哀・・」

かわいいぜ・・」

「哀ちゃん、似合うわよ・・」

「そう・・？」

「じゃあ、買おうぜ」

「買わなきゃね」

「へ？」

気付けば有希子さんに着替えさせられていて、いつの間にかそれは
買い物袋に入っていた

「新ちゃんはこれとこれとこれとこれと・・・」

「おい！」

今家に一体どれだけ服があるのかわかってんのか？！

俺が新一の時の服も大量だしコナンの服も一体どれだけあるんだよ？

もう家に入らないぜ」

「でも上のフロアで買ったんだもん」

「はぁ・・・」

そうしているうち・・・

一日は終わった

？
(後書き)

意味不過ぎてすみません

真実

あの日からだいぶたった・・

やっと養子は成立して、証人保護プログラムにより、名前も変更された

私は工藤志保に

彼は工藤新一に

・
もう今までの友達に今までと同じようには会うことも出来なくなる・

当然、探偵団のみんなも、毛利探偵たちにも

工藤新一は、事件の捜査に行ったつきり失踪してしまったという事になった

宮野志保はもう日本警察もアポトキシンを作っていた科学者だということは知られていて、恐らく爆発した組織のアジトの死体のどれかがその人物だろうと、結局死亡扱いになった

これからはまったく別の二人として・・

彼はもう必要ないといってメガネをかけなくなった

「母さん」

「なーに？」

「あの会社から電話」

「オッケー」

はーいお電話変わりました」

「あ、先日のもんです

撮影のことなど、説明がありますので、×月×日本社まで来てくだ
さい」

「はーいわかりました

はい」

「なんだって？」

「撮影とか、説明があるから今度本社に来てくれって

志保ちゃんは？」

「伝えにいつてくる」

＊＊

正式に養子になる前、隣の家に移動した

空いていた俺の隣の部屋に、志保の私物をすべて移動させた

俺の部屋と同じ大きさで、奥にベッド、隣にデスク、パソコンなど、博士の家の地下室などにあったものはすべて移動した

「入るぞ」

「はい」

志保はパソコンに向かっていた

「さっきあの会社から電話があって、撮影の事などの説明があるから、今度来てくれってさ」

「そう・・・」

「何見てんだ？」

「ああ、これ、組織のパソコンすべてから取り出したデータを、少しずつ見てるの・・・」

「大丈夫か？」

「ええ・・・」

誰が死んだとか、表向きに誰がどこで何をする予定だとか、そういうこと、いろいろと細かくかかれてて・・・

中間の事は知ってる事もあるんだけど、さすがに違うクリスマスとかの面は知らない事も多くて・・・

知らなかった組織所有の会社も意外と多いのよ・・・

まあ、それはわついたりたちが知らないだけで、もう潰されてるでしょうけど・・・

あ、これよ・・・」

志保がひとつクリックすると、何枚かの写真が出てきた

「ここが、私のいた研究所・・・

そして・・・こっちは組織が所有しているのとは別の、他のところが持っている会社

ここでは日本に戻ったばかりの頃、まだ任務が与えられる前ね・・・」

「へえ・・・」

「そしてここが・・・アポトキシンだけのために作られた建物・・・」

彼女の口からは、いろいろなことが出てきた

「あれ・・・ここ・・・」

「ええ・・・」

ここは、前に組織が使っていた建物なんだけど、使わなくなって以来ほったらかしね・・・」

「ここって・・・」

「ええ・・・」

姉が死んだところ

ここは組織の待ち合わせにちょうどいい場所だったから、あっち面の人はここを中心に回ってた・・・」

志保はその写真をクリックした

そこからは明美さんの写真、そして死亡した状況写真があった

「これ・・・」

「すべて組織が警視庁のデータを持ってきたものよ

実は・・・あなたもよく知っているあの人は、組織の一人・・・」

規模

「目暮警部・・・」

「なっ・・・」

「彼も、その一人

コードネーム、カシヤツサ・・・」

「警部が・・・まさか・・・」

「よく考えて見なさい・・・」

あなたは何ヶ月も事件に言っていると言って消えている・・・

そしてたまに出没している・・・

普通の人なら本当にそうだと思うかも知れないけれど、警部は違うはず・・・

警部ならわかるはずよ・・・

そんな長引いている事件なんてない事に・・・

それを知りながらあなたに何も聞かなかったのは、あなたがその間どこでどのように生活しているかわかっていたから・・・」

「なわけ・・・」

「ちなみに、警部はFBIが確保して、今は調査をしている最中じゃないかしら？」

「どうして警部は警察に・・・」

「警察となるといろいろ立ち回りやすいのよ

他の状況だとか、自分たちで起こした事件の捜査がどこまですすんでいるとか・・・

そういうたびに警察官に扮していたら、警察官集団監禁事件ってことで大きな話になるでしょう？

そうならないように、警察官一人自身は、組織の人間にしておいたってわけ」

「組織はそこまで・・・」

「組織は世界レベルよ

この国だけじゃなくて、他の場所にもたくさん組織の会社を持っているわ

科学面じゃなくても、医学面、芸術面にもね

あなたが思っているほど小さな規模じゃないってわけ・・・」

真実 1

「そう・・・最初から無理だったの・・・」

あなたたった一人の手で組織を潰すことなんて・・・

事実、まだ発見されていない組織の会社などがあるということ、私の証言から知り、FBIはいま命がけで調べているわ・・・

ちなみに、警部からの証言によると、自分は情報面の人間で、さっき私が言ったのは別で、元々警察官だったところを組織に目に付けられ、死ぬか生きるかの二択を出され、結局組織に入ったそうよ・・・

たまたまあなたの事を見つけ、昔のあなたに似ていることを不審に思い、前に事件で他の指紋と区別するために登録した工藤新一の指紋と、あなたが警視庁で事情聴取のときにつかんだイスから出てきた子供の指紋と照合したら、見事一致

そしてよくよく組織の情報データを探ると、工藤新一はジンの手によって、あの日 آپトキシンを飲んで死んだ事になっているが、世間的に工藤新一の死体はまだ見つかっていない・・・

よって、死亡確認も出来ていないため、工藤新一の家へ調査・・・

でもそこには誰も住んでいる形跡はナシ・・・

だから警部は気付いたらしいわ

あなたは工藤新一で、何らかの方法で生き延び、そして幼児化して
いて、たまになぜか工藤新一に戻ってたびたび出沒している・・

そうすればあなたが持っている推理能力の説明もつく・・

という考えをまとめたものも彼の家のメモ帳から見つかっているわ・
・」

「じゃあ、組織にどうして報告をしなかったんだ？」

「さっきも言ったとおり、警部は元々自分が好きで組織に入ったわけ
ではないから、自分の友人の息子を死なせたくないため、組織に
は報告しなかったらしいわ・・」

「そうか・・

ボスのことは？」

「ボス？」

あの方と呼ばれている人物の事？」

「ああ・・

結局本人もしたいも見つかってねえんだ・・」

「あなた聞いてないのね・・

ボス、もうつかまってるわ・・

ボスは、私も知らない人・・

結構年寄りみたいよ・・

ここ2年くらいは、ずっとボスの秘書がすべて管理していたらしいわね・・

誰を殺すのかも・・

もうがんで、腕も動かない状況だったらしいから・・」

「じゃあ、お前はボスの正体も知らなかったんだな？」

「ええ・・

正直、ボスと直接会うことがあるのは、本当に上の人間で、そこからどんどん伝言ゲームのように伝えられていたらしいわ・・

メールでってことも多かったらしいし・・

もつとも、私は科学面

ボスとは全然違う面だから、当然あうこともなかったし・・」

「そっか・・

そういえば志保、そのデータの中に俺の事もあったか？」

「もちろんあったわ・・・」

この日に殺害された事になっていて・・・

この日に家を調査・・・

そしてあったわ・・・

これが、私の書き換えた報告書・・・

ほら、あなたの名前、死亡確認になってるじゃない？」

「ああ・・・」

「でも・・・」

「どうかしたか？」

「ずっと気になってるんだけど、私の両親の情報が全くかかれてないの・・・」

組織の人間で殺された人や、組織にとって都合が悪くなって殺した人の名前とかはあるのに・・・

ほら、ピスコとか・・・そこらへんはあるんだけど・・・」

「コードネームは？」

「知らないわ・・

でも、本名から調べる事も出来るから、いろいろ探してみているんだけど・・」

「つか・・」

ブーッブー

バイブの音が鳴った

「志保だな」

「はい・・」

『もしもし？』

私、ジョディよ・・』

「あ・・どうしました？」

『実は、今日はアメリカにある科学研究所に突入の日で、結局成功したんだけど・・

驚く人物が発見されたわ』

「それは・・？」

『宮野エレナさんと、宮野厚司さん・・・』

「え
・
・
・
・
・
・
・
?」

真実1（後書き）

めっちゃ気になるところで切りました

発見

「それって・・・」

『そう・・・』

あなたのお母さんとお父さんよ・・・』

「なわけ・・・」

だって・・・二人は20年近く前に死んでるんですよ?！」

『詳しい事はわからないんだけど、とにかくあなたに会いたがってるから、日本に連れて行くわ』

会うのは・・・いいかしら?』

「かまいません」

『じゃあ、またこんど電話するわ』

「はい・・・」

「どうした?」

「今日、FBIがアメリカにある組織が私有する研究所へ突入した

らしいんだけど、そこに・・・」

「そこに・・・？」

「私の両親がいたの・・・」

「は？」

なわけねえだろ

だってお前の両親お前が生まれてすぐに事故で亡くなったって・・・」

「表向きにはね・・・」

もしそれが、嘘だったとしたら？

私は姉から聞いた事・・

もし姉にだけ嘘の情報が伝えられていたとしたら？」

「・・・・」

「とにかく、私に会いたいらしくて、日本に連れてくるらしいの・・」

「そうか・・」

（いったいどうして・・）

タイトル考え中

「で・・・いつ？」

「今アメリカらしいから・・・明日・・・ね・・・」

「嬉しくないのか？」

「嬉しくないわけじゃないわ・・・」

でも、だからといって嬉しいわけでもないの・・・

なんとなく複雑というか・・・」

「そうか・・・」

俺は志保の肩をそっと抱いた

「でも・・・調べなきゃいけないわね」

「何を？」

「本当に私の両親なのか・・・」

もしかしたら嘘かもしれない・・・」

「DNAを鑑定すれば・・・」

「・・・・・・・・」

何も応答がなくて、そっちを見たら、そこには震えている志保がいた・・

「志保？」

「本当は・・怖い・・」

「え？」

「顔も知らない親に会うのが・・

私を見たらどう思うか・・」

「きっと・・志保の両親はどんな姿でも、笑ってくれると思うぜ」

「・・・・・・・・そうね・・」

それから・・

「ええ?!」

志保ちゃんの両親が発見された?!」

「ああ・・・」

「そうなの・・・」

緊張

あの電話から丸一日

プルル・・

家の電話が鳴った

「はい・・」

「あ、コナン君？」

あの夫婦を連れてきたんだけど、どこに行けばわからないの・・
どこへ行けばいいかしら？」

「じゃあ、ひとまず博士の家の隣の家につれてきてくれないかな？
アイツもいつしよにいるから」

「わかったわ」

そのまま電話を切った

その十数分後

ピンポーン

出たのは母さんだった

「はい」

「連れてきたわ」

「はい」

「大丈夫・・・か？」

「ええ・・・」

志保はすごく緊張しているみたいだった

母さんがドアを開ける音と共に志保は目を強く瞑った

「どうぞ」

「おじゃまします」

そしておくからリビングへ、ジョディ先生と、宮野夫婦が入ってきた

はじめて見た、親のスガタ

「志保・・・？」

志保なの？」

志保は俯いたままうなずく

声をかけたのはエレーナさんだった

彼女は、志保と同じ茶髪をロングヘアーに伸ばし、顔つきはあまり似ていなかった

父親と思われる男性は大柄なものの、優しそうな人だった

「志保・・・なの？」

だってあなた・・・あなたは・・・いま21歳でしょう？」

「すべて・・・すべて話すわ

だから・・・っ・・・」

志保は俯いたまま銀色のしずくを落とした

そして俺たちはすべてを話した

明美さんが亡くなった事、それで志保が反発して、結局幼児化してうちに匿われた事

そして母さんの養子になった事

「そう・・・明美が・・・」

「それより・・・どうして生きているのか・・・教えて？」

「ええ・・・教えるわ

私達は、あなたが私のおなかにいるときから、殺されると決まっていたの

理由は、私たちが組織の情報を少しずつFBIに渡していたから

でも、今のところ明美は組織に入らないという約束だから、妊娠していたあなたが私たちの研究を引き継ぐ事になった

でも私達はあなたたちをほったらかして死ぬわけには行かないと思って、あなたを産んだ直後、私達は身代わりにした人を爆弾の海に放り投げて、逃げたの

組織の中でもあまり存在感のない人たちに匿ってもらってたわ

結局組織の人間は私たちが殺されるのを恐れてあなたを産んですぐ自殺したように見せかけた

あなたの情報はたくさん入ってきたわ

明美とちよくちよく会っているって事もね

でも突然場所を移動したらしくて、それ以来ぱったり

明美の情報も来なかった

最後に抜けさせてくれるという条件で何か事件を起こすという事だけはわかったけど、何の事件かもわからなくて、結局それから何年も・・・

でも結局あなたと会えてよかったわ・・・」

「私も・・・よかった・・・」

志保の両親は志保の体をそっと抱きしめた

志保の肩は小刻みに震えていて、泣いているみたいだった

それが、うれし泣きなのか、悲し泣きなのかはわからなかった・・・

何も出来ない

その涙の理由^{イミ}はわからなかった

これほど、彼女を愛しいとおもったことはなかった・

「ジョディ先生・二人は・どうなるんですか？」

志保は涙をぬぐいながら涙声で言った

「恐らく、処分されると思うわ

上の人間に聞いてみないとわからないし、これからあとにどうなるかは、わからない

でも、最悪の場合・」

「・・・・」

志保の両親は悲しみにくれる表情を出した

「志保」

志保は黙って顔を上げる

「これ、プレゼント

お母さんが一番大切にしているの

これ、あなたにあげるわ」

「ありがとう・・・」

「信じられないかもしれないけれど、いつでも、あなたたちを忘れた事はなかったわ

有希子さん・・・

娘をお願いしますっ・・・」

エレーナさんは頭を下げ、母さんもうなずく

「じゃあ

でも、面会は出来ると思うから、遠慮なく言ってね」

ジョディ先生は言った

「はい・・・」

「じゃあね」

「またな」

最後に厚司さんが立った一言そういった

3人が出て行き、静まり返ったりビング

俺はなんとなく志保を自分の部屋に連れて行った

「し・・・新一っ・・・」

志保は音というものがなかった中に俺の名前をつぶやいた

俺は俯いて震える志保を優しく抱きしめる

それしか今の俺に出来る事は何一つ、なかった

そう思う俺の耳には、志保の涙声だけが響いていた

最初からなかった

あれから何分たっただろう

志保はずっと泣きつづけ、俺はそれに付き合う

それだけの時間を

そのとき、志保の携帯が鳴った

「はい」

「もしもし？」

わたし、ジョディよ

実は・・・ボスからなんだけど、恐らく二人、終身刑になると・・・言われたわ」

「そんなっ・・・」

なんでっ・・・」

「まだはつきりした事は分からないけれど、恐らくはね」

「どうしてよ・・・！」

志保はそのまま電話を切って、俺の胸の中に飛んできた

「恐らく、両親は終身刑になるだろうって・・・」

「そんなっ・・・」

「せっかく会えたのに・・・」

生きてたのに・・・」

「・・・・・・」

「そうよ・・・」

最初からなかったのよ・・・

私には・・・

ハッピーエンドなんて・・・」

俺は何も言わなかった

いや、いえなかった

彼女のように生まれる前から犯罪者として生きる事を決められて、
そむけば死

しかも家族は姉だけ

そんな中でたった一人の姉さえも失い、絶望と悲しみしかなかった
気持ちの何がわかる？

そう、俺にはなかった

彼女にかけられる言葉の欠片も・

忘れない

あの電話から2時間

志保はずっと俺の胸の中で泣き続け、結局眠ってしまった

俺の服の胸元はまだ濡れているが、着替えたいと思わない

目を真っ赤にして眠っている志保の頬には涙の後がいくつもある

「志保・・・」

その言葉が通じたかのように志保はゆっくり目を開いた

「志保？」

「ここは・・・」

「オメエ、寝ちまったから・・・」

「あれから、連絡なかった？」

「なかったよ」

「そう・・・」

起き上がり、下半身だけが布団をかけている志保の顔は哀しいということだけを意味していた

「昼飯、食うか？」

「部屋で食べるわ」

「・・・取ってくるわ」

俺はそう言って部屋から出た

なんとなく志保の哀しげな顔を見るのは辛かった

『所詮自分には必要ない』と訴えている気がしてどうしようもなくて

どうしても立ち去りたい気分だった

別にしたに下りていくわけでもなく、タダ壁にもたれかかっている
だけだった

「つくうつ・・・・・・・・」

そう、腹が立つ

すぐそばにいながら何も出来ない

志保の心のそこに手を差し伸べる事も出来ない自分は、不要だむりよくと感
じる

俺はそんなことを考えながら下りていった

「新・・・」

「昼、上で食うってよ」

「そう」

はい、コーヒーとサンドイッチ」

「ありがとな、母さん」

「ううん」

俺は受け取り、上に上がって志保の部屋の前で深呼吸をした

そう、自分が笑ってないで誰が元気付ける？

志保の頼りは、自身^{おれ}しかないのだから

一度目を閉じ、ゆっくり開いてドアを開けた

「母さんが用意してくれてたコーヒーとサンドイッチ、いっしょに

食おうぜ」

ベッドに座っている志保は「うん」とうなずいた

志保は黙っていた

長い沈黙が流れ、それを破ったのは俺だった

「もう一度寝るか？」

「いいわ・・・」

なんとなく眠る気分じゃないから・・・

ねえ新一、これ、付けてくれない？」

志保が俺に差し出したのはさっきのネックレスだった

「わかった」

俺はゆっくり受け取り、志保の首につけた

「似合う？」

「ああ・・・」

「ねえ新一・・・」

これ、どうやったら忘れられるかしら・・・？」

もっとも答えられない質問だった

気持ちを理解できない

理解できるような人物ではない俺にそんな事を聞かれても、困るだけだった

「忘れなくていいんだ・・・」

忘れないで、思い出さない箱に入れておけばいいんだ・・・」

俺はそういつて志保を抱き寄せた

志保の体制は前かがみになり、そのまま体重をかけてきて、結局俺によしかかる形になった

「ありがとう」

そのたった5文字が哀しいような気がして、俺は彼女の唇に、自分の唇を口付けた

忘れない（後書き）

意味不明だな

空席

翌日

志保は学校に行きたくないというため、俺だけが行く事になった

名前が変わったのは養子に入ったため

そういうことになっている

本当なら俺も休んでそばにいてやりたいが、母さんがダメだといって追い出されてしまった

「はよー」

「あれ？」

「哀ちゃんは？」

「歩美しらねえんだ・・」

「なんか・・調子悪いから休むんだと」

「そうなんだあ・・・」

さっさと授業が終わればいい

そう思っていた

二時間目の算数の時間

「じゃあ、この問題をやってくれる人！」

先生がそういうとみんながいっせいに手を挙げた

そんな中、俺だけが手を挙げていない

先生は俺に気付いたらしく

「江戸川君」

たった一人手を挙げない俺にわざと当てた

「125」

俺は立つわけでもなく頬杖をついたまま言った

「正解・・・」

手を挙げないでサボっている俺は発表できないだろうと当てたのに
悔しがっていた

こんな問題、問題でもないほど簡単だった

ちらっと隣の席を見ると、誰もいない空席

なんとなく寂しかった

今日は午前授業だったため、普段よりも早くおわり、俺は誰よりも先に教室を飛び出した

歩いて5分の場所にある家

普段は15分以上かけて通っていたのに、たった一つ横断歩道を渡り、中通にはいったらすぐに見えるでかい家

俺は誰もいない道を走り、懐かしいドアを開いた

タイトル考え中

「お帰り新ちゃん」

なんとなく18年前にいたようだった

自分の体にしたら重たいランドセルをしょい、自分から感じる視界は低く、母さんが台所でおやつを用意している

まるで俺が小学生の時のようだった

「し・・志保は？」

「部屋

新ちゃんの帰り、待ってたわよ」

「わかった」

俺は階段を一段飛ばしで駆け上がり、部屋にランドセルを投げ捨て、すぐに隣の志保の部屋に入った

「お帰りなさい」

志保は小さなテーブルのあたりで座っていた

「た・・ただいま・・」

俺はほっとした

心のどこかで志保に何かあるんじゃないかと思っていたみたいで、
無事にいる志保の姿を見ると、拍子抜けした

「どうかした？」

「いや・・」

不思議そうな目で見る志保に、「お前を心配していた」なんて言え
なかった

「私、明日は学校に行くから・・」

「無理・・しなくていいんだぞ？」

「ううん

ほかの事に気をとられたほうが忘れやすいかと思って」

「・・・お前がそれでいいんだったら、いいと思うぜ」

「ありがとう」

そういった志保は、どこか哀しげだった

タイトル考え中

「なあ志保・・・来週・・・パーティーいかねえか？」

3秒ほどの沈黙を破ったのは彼だった

「パーティー？」

「ああ・・・今日の昼蘭から電話があって、また園子の家がホテルをたてたらしくて、その記念パーティーをそのホテルで開くらしいんだ

そのパーティーが二日間で泊りがけらしい

おっちゃんが招待されて・・・いっしょにいかねえかって誘われたんだ
知人として

気分転換にもなるし・・・どーだ？」

「そうね・・・

いろいろ忘れるのにも・・・いいかもね・・・

でも、そんなパーティーに私までいいの？」

「ああ・・・

その日、母さんたちが取材に鹿児島に行くらしくて、家を空けてる
そうだからちよいどいいし」

「じゃあ、お願いするわ」

「んじゃ、そういうことで返事しておくよ」

「ええ・・・」

「それで母さんさ、オメエが行くかもまだわからないのにもうすでに衣装の準備始めちゃって・・・」

母さんも乗り気みたいだぜ」

「本当、楽しんで世話する人もこの世にいるものなのね」

「だなぁ」

そういつて彼はポケットから携帯を出し、連絡をした

「オツケー混ぜてもらえるってよ」

「でも・・・元から招待してない人の分の部屋まであるのかしら？」

「結構すごいところしくて、そうそう簡単には埋まらないくらい部屋数が多いらしいぜ」

「さすが鈴木財閥ね」

「だよな・・

ぼんぼんいろんなものつくるたびにいろんなパーティーひらくんだから」

「本当、世界って意外と狭いのね」

「いえてるな」

私はこういうとき、嫌な事は本当に忘れられるものなのだと教わった

パーティー1

パーティー当日

「うわーすごい」

そういつて声をあげたのは蘭さんだった

「さっすが鈴木財閥のホテル！」

「でしょ？」

このホテル、今までで一番パパが力を入れたホテルだから、出来た時大喜びしてたのよ」

「へえ・・・」

「本当、心配ね」

「あ？」

ああ、警備の事か？

鈴木財閥だから、それくらい・・・」

「そうじゃなくて」

「え？」

「あなたといっしょにしていると絶対事件に巻き込まれるんだもの
今回は何人死ぬかしらね？」

「おいおい・・・」

「じゃあ、部屋取りに行こう」

蘭さんが声をあげた

そして・・・

「安心してね哀ちゃん

二人きりになれるように、私たちと別の部屋にしてあげるから」

蘭さんはこっそりそう言ってウィンクをした

「え・・・？」

「私たちがいたら、お邪魔でしょ？」

蘭さんはそう言って鍵をとりに行った

「はい、鍵

楽しんでね」

「どうも・・・」

「園子は違うところなんだよね？」

「うん」

最上階の一番いい部屋にしてもらったんだ

パパにおねだりしちゃった」

「いいですねー」

私たちとはおねだりの規模が違って」

「アハハ、そうだね」

「おいおい蘭

このガキたち二人だけで大丈夫なのか？」

「大丈夫よ

ふたりともしっかりしてるもの」

「そうか」

「おいおい・・・蘭の奴どうしたんだよ・・・

ふだんなら『危ないからいっしょね』とかいいそうなのによお・・・」

「さあ、そのままのイミなんじゃない？」

「だいいいけどな」

「部屋、いきましよう」

「だな・・」

蘭姉ちゃん、僕たち先にお部屋いくね」

「いってらっしゃい」

蘭さんはそういって手を振った

私たちの部屋は、五階の部屋だった

ごく普通の部屋で、とても綺麗にされていた

「じゃあ、私脱衣室で着替えるから、のぞかないでよね」

「わぁーってるよ」

そう、今回のパーティーは夜を挟むためここでドレスに着替えるのだった

結局有希子さんに渡されたものは、紺色のドレスだった

胸元には赤いバラのコサージュがついていて、足首の辺りまであるものだった

そして、用意されたのはドレスだけじゃなく、靴もだった

黒いパンプスを用意された

そろそろ彼も着替え終えている頃だろう

話ついは着替え終え、荷物を持ってドアを開けた

パーティー2

「おまたせ」

そのとき体に何か体重をかけられるきがした

正体は、彼が抱きついていたので

「は・・・？」

「似合ってるよ

すげえ可愛い」

「・・・・・・・・ありがとう・・・・・・・・」

体を離された私は赤くなっていただろう

「行こうぜ」

彼は有希子さんが選んだであろうスーツだった

私たちが会場へ入った時にはもうたくさんの人がいた

「はぐれないように」

そういつて彼は私の手を握った

「な？」

「・・・」

私はなんて返せばいいのかわからなかった

結局蘭さんたちと合流して、空いているテーブルを囲んだ

「じゃあ私園子のところ言ってくるから

くれぐれも酔いつぶれないでよね？」

「わかってるよ！」

「俺たちもとってくるか」

「そうね」

「じゃあ、俺はあっちいってくるから、迷子になるんじゃないぞ」

毛利探偵は探偵とは思えないことを言っどどっかにいってしまった

「じゃ、いくか」

パーティー3

彼は一方的に私の手を引いてケーキを取りに行く

「どれにする？」

「じゃあ・・・」

私は自分にしたら高いテーブルからひとつ、ケーキののった皿を取った

「行くか」

「ええ・・・」

私達は元いた場所に戻り、ケーキを食べた

・・・ケーキ・・・

ケーキ・・・昔、それだけでご飯になるからと作ったことがあった

考えてみれば、今時分が出来る事の研究や勉強以外は、すべて姉に教わったものだ

今気付いた

私はそれを食べながら感じた

「次どうする？」

「そうね・・・

お任せするわ」

「そうか

じゃあ、おめえ待ってろよ」

そういつていつてしまった

数分して戻ってきた彼の腕にはたくさんの料理がのっかっていた

ふたつはパイ、そして二つの飲み物だった

「危ないじゃない！」

「もうちょっと体大きければ楽なんだけどな」

「仕方ない事じゃない」

「まーな」

「あなたパイなんて好きなの？」

「レモンパイ、大好物だな」

「ふうん」

「オメエも食べてみろよな」

「・・・ええ・・・」

私はひとつ食べた

その味は、甘いけれど少しすっぱい

恋と同じ味だった

恋も、甘いけれどどこか哀しくて、どこか苦い

どこかにスパイスが加えられている

そう思った

私がひとつ食べ終えた頃には彼は二つ目を食べていた

「あなたよくもまあそんなに食べられるわね」

「まーな

俺は体が変わっても食欲はかわらねえから」

「そう・・・

私、飲み物として来るわ」

私はそう言って飲み物置き場のところへ行った

さっきは普通のジュースだったから、何か炭酸が飲みたいと思った

私は適当にグラスに入っている飲み物を取ってきた

「お帰り」

私はすぐ持ってきた飲み物を飲んだ

「・・・・・・なにこれ・・・」

「ん？」

って・・・オメエ、それ酒じゃねえか！」

「お酒？」

どうりで変な味がするわ・・・」

「大丈夫か？」

「一口しか飲んでないから、たぶん」

「水取ってくるから休んでろ！」

「あ・・・」

私の不注意だった

いわれてみればあの場所に子供なんてだれもいなくて、私だけがあの場所にいた子供だった

数分して戻ってきた彼は水と薬を持っていて、その後ろに蘭さんがいた

「哀ちゃん、だいじょうぶ？」

「ええ・・・」

「これ、蘭にもらったから飲めよ」

「ええ・・・」

私はそれを飲んだけど、すでにどこか頭は朦朧としていた

「これ・・・シャンパンだな・・・」

「・・・ソーダかと思ったわ」

「色でわかるだろ」

「変わったものだとおもったのよ・・・」

「オメエな・・・」

「ん・・・」

ついに体のだるさに耐えられなくなり、テーブルに突っ伏した

「オイ、部屋戻るぞ

おい！」

「もうらめ・・・」

「おい！」

ついにろれつも回らなくなり、声を出す力すらなくなった

＊＊

困ったな・・・

「ひとまず、私が部屋運ぼうか？」

「頼むよ蘭姉ちゃん」

「わかった」

蘭はそうやって志保を抱き上げ、部屋まで連れて行ってもらった

「ねえ、哀ちゃんの荷物ってどこか知らない？」

「これだけど・・・」

「そっか・・・」

じゃあ、コナン君ひとまず部屋から出てくれる？

哀ちゃん、これじゃ寝づらいと思うから、着替えさせるよ」

「あ・・わかった！」

俺はあわてて部屋から出た

数分して蘭が出てきた

「哀ちゃん、一回起きたから、パジャマに着替えたんだけ

このパーティー夜中までやるらしいから、もう寝なさい」

「わかった

ありがとう蘭姉ちゃん」

「ううん

じゃあね」

蘭はそう言って会場の方へ戻った

俺が部屋に入ると、ベッドに座っている志保がいた

「大丈夫かよ」

「ええ・・

あんとか・・」

志保のろれつはまわっていないく、頭を押さえていた

俺は志保のベッドに座った

「寝たらどうだ？」

「眠れないのよ・・

頭痛くて・・」

「オメエも酒弱いな」

「こんな体じゃなきゃ強いだよ」

「とにかく、俺着替えてくっから・・・」

俺が立ち上がろうとしたとき、肩に重みを感じた

「へ？」

振り向くと俺の肩に志保の頭が乗っていて、もう片方の肩に腕が乗

っていた

志保は寝息を立てていて、体重はすべてかかっていた

俺がそれを振りほどこうとしたら・・

「まって・・

いああいで・・（いかないで）」

俺はしばらく待っていたが、とても離れる様子はないので、腕をゆっくりほどこいて、ベッドに寝かし、自分も寝た

今回は来てよかったと思った

夜中

夜中・・

かすかな頭痛と共に、目がさめ、時計を見るとまだ夜中の4時だった

服が変わっていることに気付いて荷物を見ると、ドレスは綺麗にたたまれていたので、蘭さんが着替えを手伝ってくれたのだろう

何も覚えていない・・

寝ぼけている時の記憶はすべて吹っ飛ぶ癖がある

カーテンをちらっと開けると、外は外灯の光で照らされていて、自分が見るものは、すべて上から見えていた

部屋を出て見ると、冷たい空気が肌を通り、薄暗い電気に照らされ、すぐに戻った

部屋に戻っても何もすることなんてない

そんな時、私の手に握られた携帯電話が振るえ、電話を出ると、あ

の人物からの電話だった

弱い自分、強い自分

電話をかけたのは私、蘭

「はい」

彼女は6コール目で出た

「もしもし？」

哀ちゃん？

いま、大丈夫かな？」

「ええ・・・大丈夫よ」

「出てきてくれる？」

「わかったわ」

彼女はそのまま上着をはおり、廊下に出てきた

私達はそこであい、ロビーまで行く事にした

「どうかしたんですか？」

「別に

ただ・・・外の空気を吸いに廊下に出たら・・・哀ちゃんの姿が見えて、
すぐいなくなっちゃったからなんとなく連絡してみたの」

「・・・そうですか・・・」

「アイツ、寝た？」

「ええ・・・ぐっすりと」

「そっか・・・」

アイツ、寝起き悪いから、きっと手焼くよ？」

「そうなんですか・・・」

「どうかした？」

「最近・・・わからなくなるんです

私は・・・本当に彼と幸せになってもいいのか・・・わからなくなるんです・・・」

「・・・いいんだよ

哀ちゃんは今までいっぱい苦しい思いをしてきたんでしょ？」

その分、幸せにならなきゃ！」

「でも・・私が幸せになるの・・彼と幸せになる事は違うんじゃないかしら・・

加害者の私が・・つりあうわけ・・」

「そんなの関係ないと思うよ・・

だって、幸せに、加害者も被害者もないと思う

もしかしたら二人の間にそういう意識があつたとしても、お互いがそれで、幸せに、満足できるのであれば、いいと思うな」

「・・・して・・・どうして・・蘭さんはそんなに強いのか・・・・・」

哀ちゃんの口からこぼれてきたのは弱々しい声だった

「強くなんかないよ」

「・・・え・・・？」

「今まで私は、『毎日がんばっていたら絶対新一が帰ってきてくれる』っておもって強くいられた

新一という存在のおかげでね

でも結局新一は私の元に返ってきてくれることはなくて、結局哀ちゃんに移っちゃった

私、初めは哀ちゃんを憎んだ

でもさ、その後哀ちゃんから話を聞いて、私は幸せだってわかって、自分ばかりがかわいそうじゃないってわかったから、自分だけでも今までどおりになれるようになって思っただけ

それに、私よりも、哀ちゃんの方が強いんじゃない？」

「・・・どうして・・・？」

「だって哀ちゃんは、生まれたときから18年間、ずっとお姉さんのためだけに生きてきたんでしょ？」

そのあと私たちの環境に来てから、ずっとクールできつい哀ちゃんを演じていたんだよね？」

自分が人前で壊れるのが嫌で、ずっと、本性じぶんを押し殺して第三者の『灰原哀』という名の違う自分を生きていた

でも、そんな事弱かったら出来ない

人前で泣き喚いたりしちゃうでしょ？

そんな、誰も肉親もいなかったら
そうだよ？

前コナン君だったときに新一に子供として相談されたよ

『灰原が本当はそんなに強くないのに自分が強いぶって自分を隠しているんだけど、同じ女だから相談にのってやってくれないか』って……

そのときは何のことかわからなかった……

でもこの前わかったよ

新一は……哀ちゃんの本当を知らない……

哀ちゃんは本当は単純

クールな哀ちゃん

でもそれは、『灰原哀』の表向きな哀ちゃん

そのないめんに弱い自分を隠さなければいけないと思う哀ちゃん

ほらね、簡単

哀ちゃんは、すごく弱いんだよね？

でもそれを隠そうとした

そっちの面で、すごく強い

でも、内面はすごく弱い、普通の女の子なんだよ・

そうでしょ？」

私はやばいとおもった

言い過ぎてしまった・・・？

「うっ・・・ごめん！」

いいすぎちゃった・・・？」

「がう・・・違うわ・・・

確かに・・・私はそういう風に生きてきた・・・

でもね、私が強くいられたのは・・・

強い自分として生きていけたのは・・・

蘭さん・・・

あなたが・・・いたから・・・」

「・・・私？」

タイトル考え中

「あ、あなたが・・・姉に似ていたから・・・

傷つけたくなかった」

「・・・・・・・・そうなん・・・だ・・・

じゃあさ、哀ちゃんは・・・

優しいね」

「・・・・・・・・・・・？」

何が・・・・・・・・？」

「だって、ただ似ているだけの人にも優しくするんでしょ？

優しすぎる・・・よ・・・

私にそれが出来るかな・・・」

「いいのよ・・・出来なくて

出来なくても、あなたは十分に優しいから」

「・・・ありがとう・・・」

「私、戻るわ

あの人起きたかもしれないし」

「うん じゃあね」

「じゃあ」

私は遠ざかっていく哀ちゃんを見送った

甘い時間

私が部屋に戻ったころ、まだこの人は起きてない・・

・ほかにすることもないし仕方なく寝よう・・そう思ったときだった・

「つ・か・ま・え・た」

「!?・・・」

驚いた

後ろから誰かに抱きつかれたのだから

誰かといっても決まってる

オートロックのこのホテルの個室で私を抱きしめられるのは彼だけ

新一君だけ

「ちょっ・・・・・・・・」

「どこいってたんだ?
こんな夜中」

「ロビーで蘭さんと会ってた
ただそれだけのことっ・・」

「ふうーん

こーんな夜中にわざわざ会って話す事・・・か」

「いいから離してよ」

「い・や・だ」

「なにが『嫌だ』よ

母親とのハグをせがむ子供と変わんないじゃない」

「酷いな、そのたとえ」

「いいから離れて

コレじゃ寝ることすら出来ない」

「そっかそっか

じゃあいつしよに寝ようぜ」

「あのね・・・！」

彼はそのまま左側のベッドに倒れこんだ

そして布団をかぶる

「ちよっ・・・」

「離さないぜ」

そういつてわたしの両腕ごと抱きしめる

たとえ彼が子供の体力だとしても、このわたしが叶うわけも無い

＊＊

志保を強く抱きしめベッドにもぐりこむ

これ以上何も、何もいらなと思った

子供の姿のため、旅行やデートが出来ない俺たちはこういう時間が一番甘い

心臓が高鳴り、それ以上の刺激を求めて俺の中の性が暴れる

俺は、志保の唇に己のそれを押し付けた

ディープキス

それを普通の小学生がすることはまず無い

俺たちのような・・・まれな例外を除けば・・・

何度も角度を変えながら・・・もう一分はたつ頃だろう

志保は抵抗しながらも、この瞬間に溶かされていく

一度はじめたら止められない

もうストッパーは利かなくなっている

＊＊

「んっ・んんっ・」

やめたい

やめたくない

二つの気持ちが支配している中、結局動けないでいる

あれからどれだけの時間がたったのだろうか・

だいぶたって彼が唇を離す

私の中では、なんとなく物足りなかった

「お・・おい・」

なんとなく、抱きついてしまった

そんなわたしをこの人は、優しく包んでくれた・・・

甘い時間（後書き）

ちよつと・・・エロかったかも・・・？

事件発生

光に照らされ目を開いたそこは見覚えの無い天井

ああ、ホテルに居るんだった・・

いつもと違うぬくもりを感じてふと横を見ると大好きな彼の姿

あの夜と変わらず抱き合ったままだった

目が覚めたいまでも離れたくない

そう思ってもとの体制に戻る

小さく首が動いて、ゆっくりと目が開いて、綺麗な瞳が浮かんできた

「おはよう」

「はよっ・・」

「今は午前9時30分

翌日パーティーが始まった頃ね」

「だな・・

じゃ、行くか・・」

昨日の衣装を着なおして会場に行ってみると、もう蘭さんたちも着いていた

「おはよう、哀ちゃん、コナン君」

「おはよう蘭姉ちゃん」

「おはようございます」

蘭さんは突然しゃがみ、私の耳元でささやいた

「あの後新一といい事あったでしょ？」

「えっ・・・」

「ウフフ♪」

驚いた

パッ

「ちょっと・・・？」

突然明かりが消えた

このパーティー会場はひとつも窓が無いため、何の光も得られない

「哀！」

「ここよ」

「離れるなよっ・・・」

そのときだった・・・

「きゃあああああああああああ！」

女性の鋭い悲鳴が上がった

耳の奥に響く、高い声

この声が彼の好奇心を刺激しないわけが無い

「新一君」

「ああ、行くぞっ！」

彼が駆け出した先には、真っ赤な血の中に女性が倒れていた・・・

事件発生（後書き）

ちよつと・・・予定変更です

これからは推理編

その後に・・・急展開します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0981w/>

すれ違いゆく世界

2011年11月26日17時55分発行